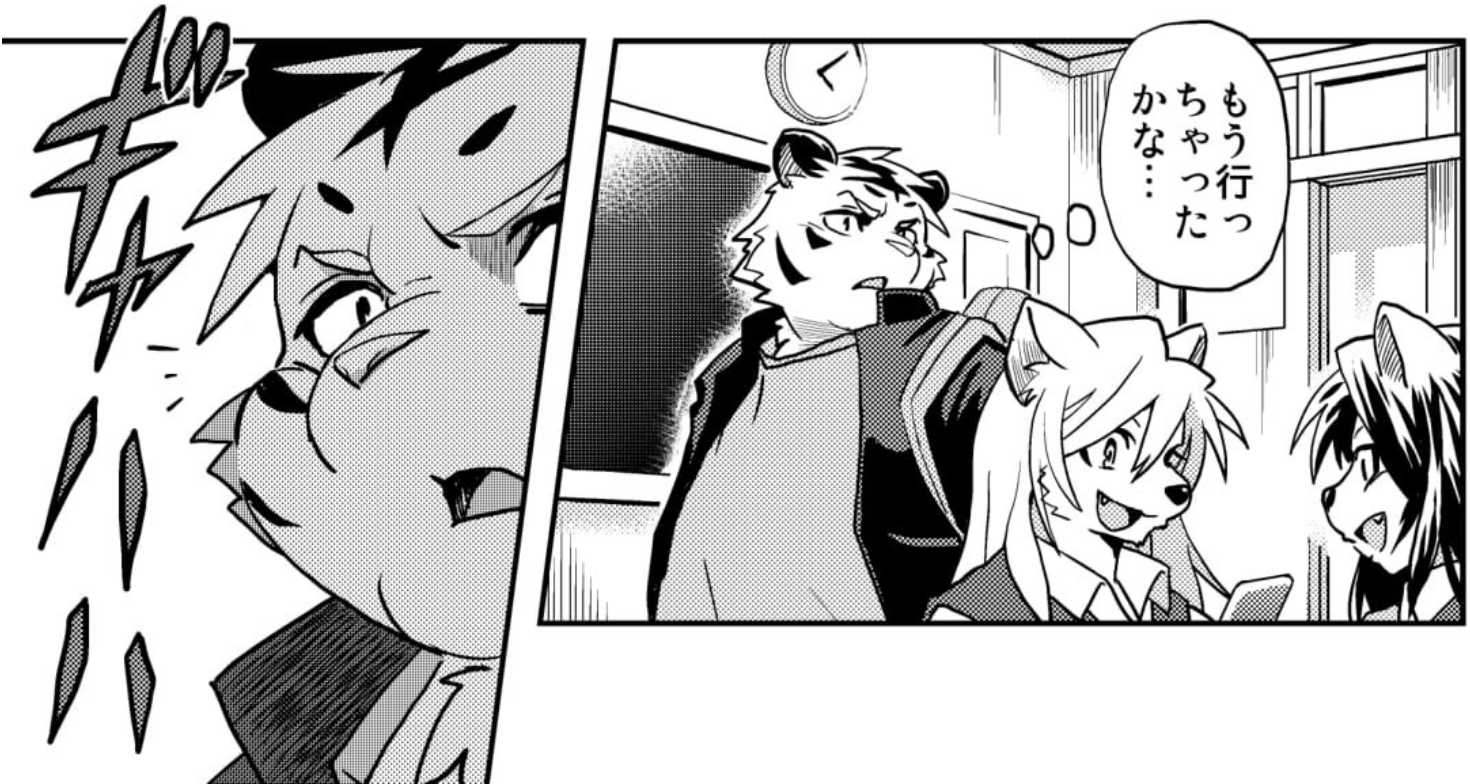

Presented By
POPO DYLAN
『風に吹かれて』
Kaze Ni Hukarete
成人向け
ADULTS ONLY
18歳未満の購入・閲覧禁止


春――
新入生の仮入部が盛んになるその季節
ボタ君部活行こうぜぇ
よし…
少年はボタという男の子の存在に心奪われていた
慕野（ぼの） 裕次郎（ゆうじろう）
愛称:ゆーちゃん


もう行っちゃったかな…
ガバッ

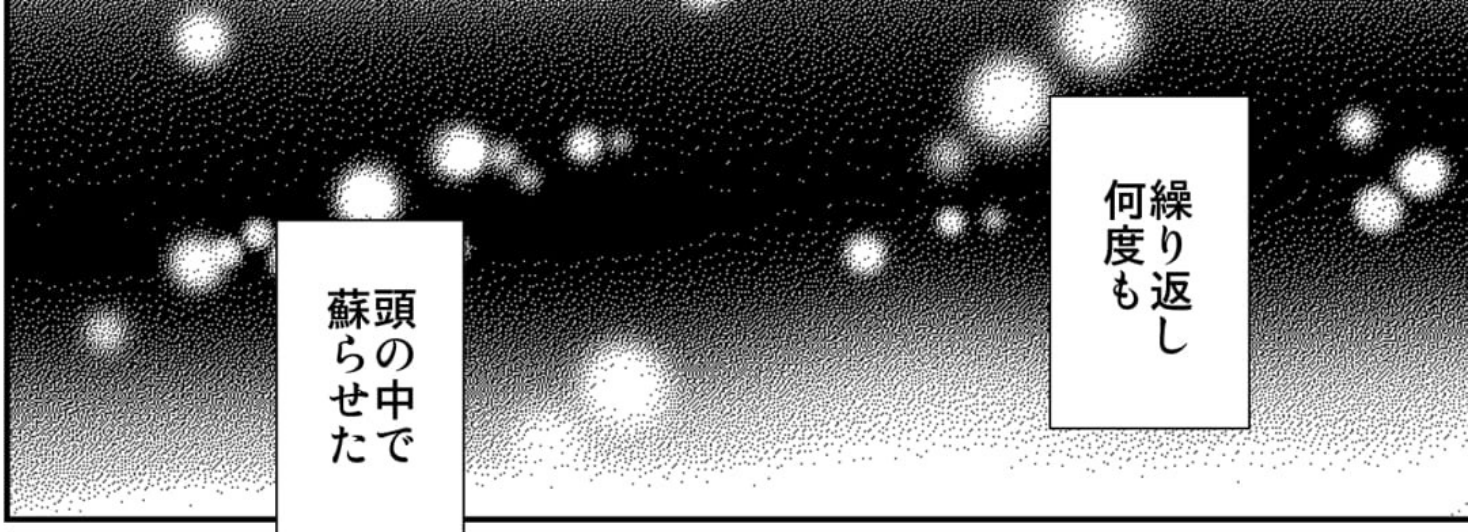

コイツの乳
マジで女みてぇ
なんだけど
つかコイツ
触ってもチンコ
ねぇしな

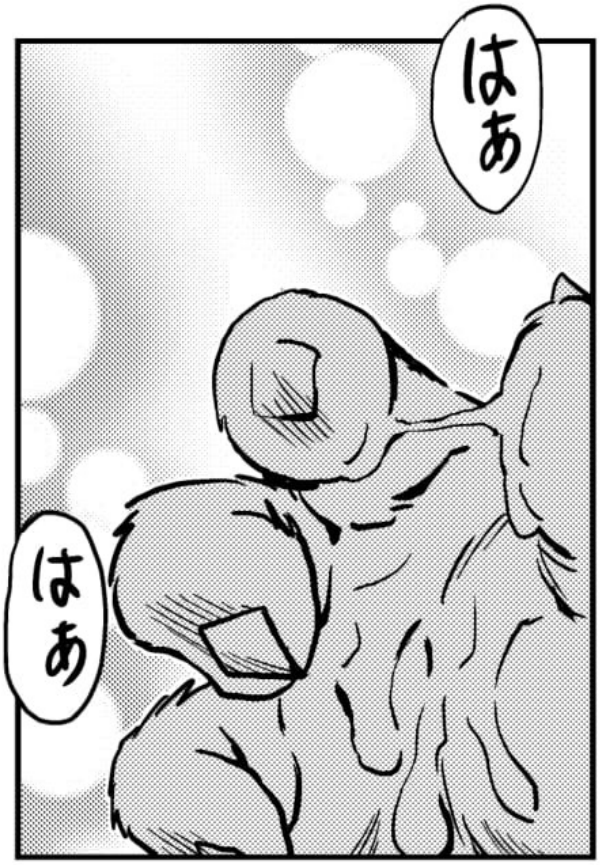

その時
少年は恋慕う
存在が
クラスメイト
から辱めを
受ける姿を
見て


性的興奮を
覚えていた…


憤怒や嫉妬
という感情
よりも先に
うわっ
コイツ感じて
勃起してるし
やっ
ゆーちゃんの想い人
冬瓜（ふゆうり） ボタ


少年は――
はぁ
クチュ
はぁ
クチュ
はぁ
はぁ
はぁ
ボタ君が勃起…
ボタ君が勃起…
ボタ君が勃起…
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
見てみたい
ボタ君の
……
先ほど
目の当たりに
した光景を――


繰り返し
何度も
頭の中で
蘇らせた


はあ
はあ


はあ
はあ
身を鎮め
我に戻った
が――
はあ


はあ
あとには
――
偽りの
充足感と
――
はあ


深い寂寥感（せきりょうかん）
だけが残った

若葉たちの空に「恋はみずいろ」

文・もけ　原作・ぽぽんパペオン

目覚まし時計の液晶は夜の10時半ごろを指していた。寝返りを打ちながらチラリとそれへ視線を向け、きちんとアラームがセットされているのか再び確認した。

液晶の右下には『AM5:30』とアラームの設定時間が小さく表示されている。これで明日の朝は問題なく起きれるだろう。

天井を見上げながら仰向けに寝転がる。静かで快適な寝室だった。

彼――白い毛皮を纏い恰幅の良い体をした虎獣人の青年、慕野裕次郎は、そうしみじみ思った。

慕野は今、実兄との折り合いの悪さもあって、学校の近くのアパートへと引っ越して一人暮らしを満喫していた。

生活を自分で管理する必要もあるし、折角の休みにアルバイトで水を差さなければならないことも大変ではあったが、無遠慮な家族がノックもせずに部屋へ侵入してくる心配も、顔を合わせるたびに険悪な空気になる相手と鉢合わせる心配もない生活というのは、一度味わえば手放したくない環境だった。

それに……、と慕野は目を閉じながらむふふとニヤけ面を浮かべる。

瞼の裏に、同じ学年の男の子を思い浮かべる。控えめで物怖じしやすい性格をして、黒髪とふくよかな体を持ったパンダの少年。

この新しい環境の中で、彼にとって何よりも輝いている存在だった。続けるつもりのなかった卓球も、彼と同じ部活だからという理由で、結局今の学校でも続けている。

ボタ君、と口の中で呟いた。目を閉じて眠りにつこうとしていたし、実際かなりうとうとしていたのだが、その少年のことを考えているとどうにも息が荒くなった。

「はぁ……ッ」

落ち着かない気分になってゆくのを感じながらも、明日はその続ける予定もなかった卓球部の地区大会である。

レギュラーでもないのでやる事といえば応援ぐらいであるし、それもあってモチベーションはそこまで高くもなかったが、早起きして出発することを考えれば今は早く寝てしまった方が良さそうではあった。

ムラムラした気持ちを払うように再び寝返りをうち、枕に顔を埋める。同時にいつの間にか股間で膨らんでいたそれがベッドへと押し付けられた。

小さく腰を震わせながら、ベッドの横に置かれたゴミ箱と机の上のティッシュ箱を交互に眺める。白い体毛に包まれた頬を微かに赤く染めながら、熱の篭もった吐息を漏らした。

「その方がよく眠れるだろうし……」

そんな風に自分への言い訳の言葉を呟きながら、ゆっくりと体を起こす。背伸びするようにしながら机の上のティッシュ箱に手を伸ばして脇に置くと、ベッドの上に座り込みながら自らの股間をトランクスの上から撫でる。

固く勃起したそれによってテントが貼り、先端には先走りの液体が滲んでいた。浅く早い呼吸を繰り返しながらトランクスをずらして、肉棒を露出させる。元から寝るときは下着のみだったから、その気になればすぐ始められた。

右手で肉棒を触りつつベッドの脇で充電器につながれたスマートフォンへと左手を伸ばす。すぐに画面を起動して画像フォルダを開

く。薄暗い室内が画面からの光でぼんやりと明るくなった。
想像だけで息を荒くしながら目当ての画像を開く。
『コイツの乳マジで女みてぇなんだけど』
脳裏にそんな言葉が響く。
画面に映るのは、クラスメイトに後ろから胸を鷲掴みにされ、戸惑い困っているボタの写真。それを見ているだけであの時の会話が頭の中に蘇った。
ふくよかな胸を揉みしだかれ、本人も気にしているらしい股間のそれの小ささを笑われ、その辱めに顔を真っ赤にしながら慌てている時の姿。
想いを寄せる相手がそんな扱いを受けているのだから止めに入るのが筋だったのかもしれないが、慕野がとった行動はその様子を写真に収めることであった。
「俺ならもっと、優しく……ッ」
出来ることなら自分もそうやってボタの胸をまさぐり、その柔らかさを確かめてみたかった。
あんな配慮にかけた乱雑な手つきではなく、ちゃんと気持ちを込めて優しく揉んでやれるのに。
画面に映るボタの見せる戸惑いと恥辱の表情が、堪らなく艶かしい。柔らかな胸が荒々しく鷲掴みにされ指が食い込む肉感に、思わず口の中によだれさえ溜まる。
この写真を撮った時、胸を揉まれるうちに彼自身の小さめのそれが勃起していたらしい。それを想像するとさらに興奮が高まった。
自分が胸を揉んだとしても、同じように感じて勃起してくれるだろうか。その様子を頭に思い浮かべるだけで鈴口から先走りが溢れ出す。
高まる興奮と同調するように肉棒を扱き上げる手の動きが速さを増した。背筋の体毛がぞわぞわと逆立ち、長い尻尾がびくんと震える。
「ボタ君……ッ」
その興奮が限界まで高まった瞬間、気づけば慕野は想い人の名を押し殺した声で口にしていた。
それと同時に、彼の大柄な体がビクンと大きく震え、柔らかな腹が大きく揺れる。そしていきり立ったイチモツから勢いよく精液が発射された。
「あ……！」
絶頂の中で、慌てながら鈴口を右手で覆う。今から自分で飛び散らせた精液を掃除したくもなかった。
手のひらの中に熱い精液が溢れるのを感じながら、絶頂の快感に腰を小さく震わせる。
「ふぅ……、またやっちゃった」
快感の余韻に浸りながら、慕野は荒くなった息を落ち着けるように小さくため息を吐き、そう一人ごちた。
自らの精液でベトベトになった右手と股間をティッシュで拭き取ると、丸めてからゴミ箱の中に投げ込む。
スマートフォンを充電器に再びつなぎ、目覚まし時計で時間を確認すると、再度仰向けに寝転がる。
なんだかオナニーを終えると、今まで感じていなかった分までドッと疲れと眠気が押し寄せてきたような気がした。
天井を見上げながら大きくあくびをする。意識して目を閉じるまでもなく、重たくなった目蓋がすとんと降りてきた。
うとうとと意識が夢の世界に誘われていくが、完全に眠りに落ちる間際、それを遮る音が響く。
――ピンポーン
玄関の呼び鈴が鳴る音だった。こんな時間に非常識な来客だなと、

再び大きくあくびをしながら目元をこすった。
眠気に支配された緩慢な動作でベッドから起き上がろうとしていると、続けて呼び鈴が鳴り響く。
――ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン
まるでいたずらでもするかのように繰り返し鳴り響くその音に、さすがに眠気も多少覚めて来る。
「あれ、でも……」
イライラしながらも玄関へ向かおうとしたあたりで、彼はそう呟いて足を止めた。
部屋の中が静かだったせいではっきりと聞き取れたが、それにしても普段聞こえる呼び鈴よりもだいぶ音量が小さい。
もしかして隣の部屋への客だろうかと、今も鳴り続けるその音への不快感で眉間にしわを寄せながら考える。
そしてどうやら合っていらしい。
『ッ――!!――っ!』
部屋の向こうから意味まではわからないまでも何か叫ぶような声と、続けて乱雑にドアを開く音、部屋へとなだれ込む数人の靴音までも聞こえてくる。
騒がれでもしたらちゃんと寝付けるだろうかと不安を感じながら、重い足取りでベッドへと引き返した。
しかし嫌な予感というのは的中するものらしく。再び横になってうつらうつらとし始めたころ、向こうも盛り上がってきたらしい。
『――ッ!――!』
相変わらず壁を隔てて意味を聞き取れない程度にはなっているが、それでも睡眠を妨害するには十分な音量の騒ぎ声が室内へと伝わってくる。
声だけではなく、ドタドタと室内を動き回る足音に、時折何かが壁にぶつかるような音。
正直隣の部屋に怒鳴り込んでもう少し静かにしろと叫んでやりたかったが、土日のアルバイトを生活の足しにつつも未だ親のスネをかじる身である。アパート内でのトラブルを起こせば保証人である両親にも迷惑が行ってしまうだろうかと考えると、どうにも二の足を踏んでしまう。
加えて、眠くてたまらない時にあんなに騒がれてしまうと、怒る気力すらげっそりと萎えて疲れが押し寄せてくる。
慕野は大きくため息を吐くと、耳を伏せ布団を頭までかぶる。騒ぎ声と足音もこれで多少はマシになるだろうかと思いながら目を閉じた。
だが、もう少しで眠れそうなほど意識が飛んだかと思えば、壁の向こうから聞こえる物音にたたき起こされて体がびくりと震える。その繰り返しをしながら時間が刻々と流れていた。
イライラを募らせながら布団から顔を出して時計を見ると、時刻は12時を過ぎている。本当ならば2時間は早く寝ていたのにと考えると、頭に血が上るのを感じずにはいられない。
再び布団の中に潜り込んで体を丸め、早く静かになれ、早く静かになれ、と念仏のように頭の中で繰り返すが、効果はない。それどころか、どうやら逆効果だったらしいと理解させられる。
――ヒュー
風切り音が僅かに聞こえたかと思った次の瞬間、ぱんっと何かの弾ける音が響き渡る。
思わずびっくりしてベッドから転げ落ちそうになりながら慌てて周囲をきょろきょろと見回していると続けざまにその音が鳴り響いた。
「え、嘘だろ……」

――パパパパパパッ

正直考えたくもなかったが、どうやら室内で口ケット花火を飛ばしているらしい。断続的な破裂音が響き渡る。それはさすがにアパートの大家から怒られるのではないのか。

というかここまでやるような人たちだとすれば、今から注意しに向かったところで騒ぎが収まるどころか逆効果になりかねない。眠れないままに時間はどんどん過ぎてゆく。

試合には出ないとは言え、一日中応援席に立って声を張り上げるというのも中々の重労働である。用心して早寝することを諦めても、さすがにそろそろ寝なくては明日がつらい。だが、寝かせてくれない。

苛立ちと焦燥と体の疲れに不快感ばかりが高まってゆく。口ケット花火を打ち尽くしてもバカ騒ぎが終わる様子はなく、眠れもしないまま時間ばかりが過ぎてゆく。

午前2時を過ぎても全く騒ぎが収まる様子はなく、もうどうすればよいのだと諦めの境地で目を閉じていると、不意に打開策が彼の頭にひらめいた。

「そうだ！」

ベッドから降りて部屋の電気をつけると、カバンのポケットをまさぐってネコ科の耳用のイヤホンを取り出す。充電器につないだままのスマートフォンにその端子を差し込むと、動画サイトを開きなるべく曲調の穏やかそうな曲をチョイスしてリピート再生に設定した。

いくら穏やかな曲でもイヤホンの音量を大きくするとさすがに気が散るが、それでも不規則なバカ騒ぎの音に比べればだいぶ良いい。

騒ぎ声も物音も、耳元で鳴り続ける音楽にかき消されて気にならない。これでようやく眠れそうだとほっと胸をなで下ろしながら部屋の明かりを消し、横になる。

ようやく眠りにつけるというところになって初めて、自分がどれだけの疲れと眠気に襲われていたかが分かった。体が鉛のように重く、寝返りを打つ暇すらなく慕野はすとんと眠りに落ちていた。

×××

カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。明るくなった部屋の中で薄らと瞼を開きながら、慕野は少し困惑したように声を漏らし、おかしいなと思案顔浮かべる。

目覚ましが鳴る前であれば空はまだ暗いはずである。大きくあくびをしながらそのことについて少しの間思案したあと、彼は巨体を勢いよく動かしてバッと起き上がった。

「えええええええっ！」

呻くように声を上げながら時計を見ると、時刻は6時25分を指している。予定の集合時刻は6時30分。急速に目が覚めてゆくのを感じると同時に、耳元に響き続ける大音量の音楽に気づいた。

目覚まし時計の画面の右下には、変わらずアラームの予定時刻が表示されており、そこに間違いはなかった。とすると、アラームが鳴っても気づかずに眠り続けていたのかもしれない。

イヤホンを外しながら、確かにアラーム音などこの大音量にかき消されてしまいそうだと顔をしかめる。

就寝前とは打って変わって静かな壁の向こう側を恨めしそうに睨みつけたあと、彼は水浴びのような短いシャワーを済ませジャージに着替えると、昨日のうちから買っていたおにぎりとサンドイッチを冷蔵庫から取り出してカバンに詰め込む。

ドライヤーもかけないまま大急ぎで部屋から飛び出すと、自転車に跨って駆け出した。

信号での停止の合間にスマートフォンで時間を確認し、その度に額に冷や汗が滲む。

焦燥感に突き動かされながら、今までで最高速が出ているのではなかろうかという勢いで自転車を疾駆させ、駅の駐輪場に乗り捨てるように自転車を置いて集合場所へと走る。

駅の入口の方に見えるジャージの集団へと向けて走りながら、再び時間を確認すると10分の遅刻となっていた。息を切らせながら集合場所へと走り込むと、腕を組み仁王立ちをした顧問の教師が待ち構えていた。

眼鏡で際立った目つきの悪さと、猪の獣人ゆえの荒々しさを感じさせる顔立ちも手伝って、遠目からも十分な迫力を放っている。

「おせーぞ慕野！どんだけ待たせりゃ気が済むんだ！」

かなり苛立った様子の口調で雷を落とされ、咄嗟に体が萎縮してしまう。慕野の耳が伏せられ、尻尾がピンと硬直した。

「すみませんっ！寝坊して遅れてしまいましたっ！」

何か適当な遅れても仕方のない理由をでっち上げてしまえば良かったのかもしれないが、その剣幕で責め立てられる威圧感に口が滑ってしまう

「あのなぁ慕野、あんだけ早めに寝とけって言っといたろ？あ？それに朝はまず『おはようございます』だよな。だろ？」

慌てて顧問へと朝の挨拶を行いながら頭を下げる。そのいかにも焦りまくった態度が逆に相手の熱を冷ましたのか、顧問は大きな鼻をフンッと慣らし呆れたように笑うと、早く切符を買ってくるよう慕野に指示した。

先輩部員たちからの、夜遅くまで何してたんだと下ネタ混じりにあざ笑う声や、遅刻への非難、部活へのモチベーションが低いのではないのかと疑う声などの野次を背中で受け止めながら、券売機へと走る。

昨日の夜からろくなことが起きない。気が重たくなるのを感じながら切符を購入していると、背後で顧問教師の声が聞こえる。

「慕野が遅れて間に合わなかったから、次の54分発の行くぞ。つっかえないよう順番についてこい」

遅刻したことは悪かったが、そうわざわざ名前を出して重くのしかかる責任を意識させないで欲しいものだ。

踏んだり蹴ったりの状況を考えて目頭が熱くなるのを感じながら、切符を手に取り集団へと引き返す。

顧問を先頭に、女子部員の集団、続いて女子に比べ人数の多い男子部員が先輩たちから順に改札へと向かっているところだった。最後尾に、こちらへと向けて手を振る少年がいる。

「ゆー君おはよう」

彼はそう言いながら笑顔を浮かべた。少し気弱な印象を受けるが、とても穏やかで柔らかな魅力を持った笑顔。慕野の想い人である冬瓜ボタだった。

「あ、ボタ君おはよう……」

その笑顔を向けられるだけで気持ちが高揚してしまうが、それに反して疲れた声が漏れる。正直睡眠時間が短かった上に眠りも浅く、どうにも疲れが抜けきらない。

「寝坊なんて珍しいね」

「う、うん。なんだか隣の部屋の人が宴会でもやってたみたいで、その音で全然寝付けなくて」

思い返すだけで忌々しさに怒りがこみ上げてくるようだった。

目の前の少年が、それを癒すように優しげでゆったりとした調子で言葉をかけてくれる。

「そっかぁ。一人暮らしもそれはそれで大変なんだねぇ」

「うん。なんかもう、部屋の中で花火してる音まで聞こえてきてさ」
「えぇ、部屋の中で花火ぃ？」
肩を落としてそう話しながら改札をくぐってホームへと向かう。困惑しながら声を上げるボタの姿が愛らしい。
電車はどうやら快速の通過待ち中らしく、まだ発車時刻まで余裕があるうちからホームに停車していた。
先輩たちが別の車両に続々と乗り込んでゆく様子が見える。慕野とボタの二人も、座席に余裕のある車両を見繕って乗車した。
ボタを窓際に二人がけの席に並んで座る。体格の良い二人が並ぶのだから当然腕や脚が密着してしまう。慕野がなんとか赤面しそうになるのを堪えていると、その様子に何か別の解釈をしたらしいボタが穏やかな口ぶりで話しかけてくる。
「着くまで1時間もあるらしいし、ゆー君疲れているみたいだから今のうちに寝ておきなよ。着いたら起こしてあげるね」
「あ、ありがとう。助かるよ」
実際疲れていることも寝足りないことも確かだったからその申し出は嬉しいが、素直に寝息を立てるには少々刺激の強い状況だった。触れ合った腕と足から伝わってくるボタの体温に、否応なしに胸の鼓動が高鳴り体温も上がる。
まるまると肉のついた手のひらをちらりと見やり、その手を取ることができればと考えていると、こんな状況でも股間に血液が流れ込むのを感じた。
慌ててカバンを両腕に抱えるようにしてそこを隠しながら目をつぶる。
しかし一度火がついてしまうと、体の疲れに反して頭はフル稼働して隣に座る相手のことを考えてしまう。
恋人として一緒に電車旅行なんてできたら素敵だろうとか、自分の寝顔に口づけ仕様としてボタが顔を近づけていたらなど、もしもの話を勝手に想像して目が冴えていく。
結局ボタの好意の甲斐もなく、移動時間は一睡もできぬままに過ぎていった。
「ゆー君、そろそろ着くよ。起きて」
「あ、うん……。ありがとう」
寝た振りとも気づかずに起こしてくれるボタにお礼を言いながらも、騙したようでなんだか気が重かった。
わざとらしくあくびして見せながら下車し、ホームから改札へと歩いてゆく。
駅の出入口を抜けて外へと出たところで、不意に横から声をかけられた。
「ちょっとー、慕野遅刻したんだってー？」
からかうような女性の声に振り向くと、相手はボタのクラスメイトである瀬谷心美であった。三角形の耳を凛々しくピンと立てた、犬獣人の女子である。
ボタのクラスメイトの卓球部員で、部活前にボタを迎えに行くときによく出くわし、そのうち絡まれるようになった相手だった。
「うっさい。女子は先に出発してたぞ早く行けよ」
「先輩が言ってたよ。夜遅くまで変なサイト見てて寝坊してたって」
「あの先輩全部下ネタにもってくって、お前も知ってんだろ！？」
心底うるさそうに顔をしかめながら、しっしっ、と手で払うようなジェスチャーをしてみせるが、瀬谷は楽しげに笑うばかりだ。
「次の試合の日はモーニングコールでもしてあげよっか？」
「いいから先行っちまえ！」
「はいはい」
瀬谷はクスクスと笑いながら肩をすくめると、先に行った女子の

集団に追いつこうと走り出す。
　隣を歩くボタがその背を目で追いながらしみじみと言った。
「瀬谷さんって、いっつもゆー君に絡んでくるよね。仲良しなんだね」
「いやもう、ホント面倒でさー」
　感心したように話すボタに向かって、面倒くさそうな表情で肩をすくめてそう返す。
　二人の視線の先では、女子集団に追いついた瀬谷がほかの女子部員たちと笑いながら話しているのが見えた。
　その集団が大きな交差点を曲がり、地区大会の会場である市民体育館へと向かってゆく。
　後を追うように同じ交差点を曲がると、やや古びた体育館の外観が見えてきた。駐車場を突っ切るように近道をしながら建物を目指す。
　近づいてみればやはり、結構古びていてなんだか寒々しい印象を受けてしまう建物であった。
　なんかカビ臭いような気さえしてくるなと思いながら入口をくぐり、とりあえずは荷物を置くため応援席へと向かう。
「うっわー、手すりとか錆びてまっくろじゃん」
「去年よかだいぶグレード下がったよなー」
　少し先を歩く先輩たちの会話が聞こえてくる。そういえば去年の地区大会の会場になっていた県立の方の体育館は、新しく建てられたばかりでかなり綺麗な上、冷暖房完備で真新しい冷水機も置いてあっていいことずくめだったと別の先輩が話していた。
　こんな締め切った空間で汗水たらして運動して、さぞかし蒸し暑くなるのだろう。そう思うと今から憂鬱だった。
　ボタと去年使われたという県立体育館について語り合いながら自校のスペースへと向かい、座席にカバンを置きつつ時間を確認する。
　もうしばらくしたら開会式が始まる時間だ。カバンを置いたままにして、ボタと連れ立って体育館のホールへと向かった。
　ホールでは他校の生徒も合わせて、大勢が既に整列を始めていた。自分たちの学校の列へと向かい、その中に加わる。
　ボタやほかの同学年の部員たちと雑談しながら開会式が始まるのを待っていると、そのうちスピーカーからのアナウンスが入って開会を告げる。
　正直なところ、蒸し暑い中応援を続けるよりもこの開会式が憂鬱であった。
　寝不足と体に残った疲れに加えて、聞く気もないのに冗長に続く開会の言葉など、これ以上ないほどに眠気を誘う。
　幾度となく意識が飛ぶのを感じながら、どこかの偉い人だとか、選手代表だとか、県の職員の人だとかの言葉を聞き流しているうちに、意識が消失する空白の瞬間とタイミングを合わせるように喉の奥から声が漏れる。
「ふごっ……」
　自分でも驚いて咄嗟に背筋をピンと立てるのだが。その反応が余計に滑稽さを煽ったのか、付近からクスクスと笑いを押し殺す声が聞こえた。
　そりゃ自分の近くにいた奴が立ったままいびきをかいたら笑ってしまうのも分かるがと、慕野は拗ねるようにうつむきながらカァーッと顔が熱くなるのを感じた。
　そのおかげか眠気はだいぶ吹き飛び、多少はうとうととしつつも再度いびきをかいてしまうようなことはなく開会式は終了するが、自分たちのスペースへと去ってゆく他校の生徒がまた笑っているような気がして、どうにも落ち着かない。
　逃げ帰るように自校の生徒たちの輪の中に潜り込むと、ちょうど

顧問教師が選手たちに呼びかけているところだった。
「じゃ、このあと試合だからみんな六番コートに集合な。特にレギュラーの奴らは先に行っとけ」
レギュラーに選ばれた先輩たちが、朝っぱらからなぜそんなに元気なんだと思える程の勢いで、大きく返事をする。
その返事に満足げに頷いたあと、教師はふと慕野の方を見やり、またも呆れたように笑いながらぼそりと付け足した。
「それから慕野は、寝てないでしっかりしてろよ?」
「は、はい!」
不意に自分へと話を向けられて反射的に返事をしながら、内心で深くため息を吐く。昨日ちゃんと眠れていたらと思わずにはいられないが、それも今更であった。
とにかくこれ以上何も失態を見せないようにしなければ。それだけを考えながらコートへ向かう部員たちのあとに続いた。
先にシングルスの試合の準備が始まっており、自校の選手である五十嵐先輩とその対戦相手が卓球台を挟んで位置についている。
今朝から稼いだ汚名を返上するためにも応援に精を出す必要があった。
審判のホイッスルの音ともに試合が始まると、相手校の応援に負けないよう、腹の底から声を張り上げて応援する。
先輩の点が入る都度、相手から点を入れられる都度、お決まりの言葉であるが魂を込めるつもりで叫ぶ。
その甲斐あってかはしらないが、先輩は何度か危うい場面もあったものの、ゲームを連続で取得していき気づけばストレート勝ちとなっていた。
ほかのコートではまだ試合が続いてるようだし、自分たちの試合はだいぶ早く終わったようだった。
無事勝利した先輩が得意げな顔で戻ってきて、部員たちとハイタッチを決める。
「うし! じゃあ次の試合まではしばらく休憩だな。各自ちゃんと休んで備えてろよ」
和気あいあいとしたムードを顧問教師がそう締めて、部員たちは雑談しながら上の階の応援席へと戻ってゆく。
自分もそれに続こうと歩き出した慕野であったが、背後からポンと肩を叩かれて呼び止められた。振り返って見上げると、顧問教師が立っている。
「慕野、元気があっていい応援だったぞ。次もあんな感じで頼む」
「あ、はい! ありがとうございます」
昨日の夜から不幸続きではあったが、こう褒められると気分がいい。笑顔で返事をすると、顧問は少し申し訳なさそうな顔をしながら続ける。
「あー、それとな。各校一名ずつ審判やらせなきゃならねーんだけど、このあとのウチからの審判、お前やってくれるかな?」
「え、あ、はい……。大丈夫です」
右手で頭を掻きながら、少し遠慮した口ぶりでそう話す顧問へ、少しテンションの下がった声で返事をする。
顧問はこれも一年の仕事だからと、言い聞かせるように続けて話したあと、審判を行うコートの番号を告げてドタドタと足音を立てて去っていった。
これで断って同じ学年のボタに審判の役目を押し付けてしまうくらいなら、自分がやってしまおう思うのだが、応援と違ってしっかり頭も使わなければならないのがつらい。
ミスをせずにすむだろうかと不安に思いながらも、しばしの休憩を挟んでから指定されたコートを目指して歩き出す。朝食もまだで

あったし早めの昼食にしたいところだったが、それは試合が終わるまでの我慢になりそうだった。

審判といっても野球やサッカーと違って一体一の競技なので、反則やセーフやアウトなどの複雑な見極めなど必要なく、点が入った方のスコアボードにそれを記すだけでいいのが救いだった。

目的のコートへ着くと、職員の人に会釈をしながらスコアボードのそばに立ち、選手が揃うのを待つ。

「あれ……？」

コートに入場する選手たちを見つめながら、慕野は困惑の声を漏らしていた。

先ほどと同じシングルスのつもりでいたのだが、コートに入ってくるのは6人。どうやら団体戦の試合が始まったらしかった。

となるとシングルス4試合の間にダブルス1試合挟んで最大5回も続く試合の間、この疲労感と眠気に抗い続けなければならないのかと思うと気分が沈んでしまう。

ホイッスルの音とともに始まる試合を、早く終われと念じ続けながら見守った。

しかし願いに反して両チームの実力は拮抗しており、どちらもストレート勝ちさせるような真似はせず、また一人負けてしまえば次の選手が全力で巻き返しを図る。

応援する立場からすれば熱中する試合なのであろうが、熱気と湿度の増していく体育館の中で立ち続け、眠気と疲労感も合わさって頭がふらふらしてくるほどだ。

そんな中で続ける審判の業務で、大事には至らないまでも多少のミスは発生してしまう。

平謝りをしながら審判を続け、ほとんど倒れそうになりながら5試合目を終えたあとには開始から1時間半もの時間が経っていた。

さわやかな汗を流しながらお互いの健闘を讃え合う両チームのスポーツマンシップも、疲れきってしょぼしょぼする瞳からではとても輝いては見えない。

ふらふらとおぼつかない足取りで、自校のチームが試合中のコートへと向かい、ベンチの空いている場所にドッと腰を下ろした。

疲れから来る大きなため息をこぼしていると、労わるような声が背後から聞こえてくる。

「あ、ゆー君おかえり。長かったねー」

「ただいま。ほんと、カットマン多いし2対2で最終戦に進むしで疲れたよ」

「あはは、おつかれさまー」

「ん、ありがとう」

そうやってボタから笑顔でお疲れ様と言ってもらえるだけで、きつい審判の仕事を引き受けて良かったと思えてしまう。

少し横にずれてベンチにボタの座る隙間を作りながら、労いの笑顔に笑い返す。

隣同士に座って時折雑談を交えたり、点数の獲得に合わせて応援の声を張り上げながら、自校の選手たちの試合を眺めた。

既に終盤まで差し掛かっていた試合はすぐに終わり、時刻は昼を回る。

今にも腹が鳴り出しそうだった。朝から何も食べていない。空腹で目が回る思いだった。

ボタの笑顔と労いの言葉は英気を養ってくれたが、やはり心だけでなく体にもエネルギーの補給が必要だ。

おにぎりとサンドイッチに思いを馳せながら、座席へと向かうがそこにはあるはずのものがなかった。

「えっ」

呆然と、カバンを置いてあったはずの座席を眺める。ショックから立ち直って周囲をキョロキョロと見回したり、座席の下を確認してみたりするのだが、見当たらない。

他の部員たちはそれぞれ持ってきた弁当を食べ始めたり、体育館内の売店へ向かうなり外のコンビニへ買い出しに向かうなどしているが、慕野はただその場で立ち尽くしていた。

携帯は時計替わりにも使うためポケットに入れていたが、財布はカバンの中だったから外にご飯を買いに行くこともできない。当然弁当もカバンと一緒に行方不明。

この世の終わりを見ているかのように青ざめた顔で、慕野は静かにうつむいていた。

どさっとベンチに腰を落としながら頭を抱え、考え込む。

このベンチに置いた記憶はしっかりとあるから、電車に忘れたということはない。なら盗まれたのだろうかと考えると、部員全員この場から目を離していたから、その可能性は十分に考えられる。

ドッと疲れが増して来るのを感じながら、どうにかカバンを見つけ出す方法を思案する。

ベンチで弁当を食べている部員たちに声をかければカバン探しを手伝ってもらえるかもとは思ったが、今朝から失態続きである手前、これ以上迷惑をかけてしまうのも憚られる。

その場でうつむきながら考え込むこと十数分、周りからも怪訝な目で見られだした頃、事務室の存在を思い出して勢いよく立ち上がった。

落とし物としてカバンが届いているかもしれない。よしんば財布が抜かれていたとしても、今大事なのは弁当の方だ。

そう考えつくと居ても立ってもいられず、彼は事務室へと向けて小走りで向かい始めていた。

通路をたむろする他校の生徒たちをかき分けるように進んで、事務室へとたどり着いた。

表札の貼られたドアを軽くノックしてから入室し、デスクでお弁当を食べながらテレビを見ている、初老の犬獣人の事務員に話しかける。

「あ、あのー、落し物でカバン届いていませんか？」

事務員は面倒くさそうにしながら立ち上がると、聞き返してきた。

「うーん、カバンは今日は届いてないね。何が入ってたの？」

「替えのジャージと財布と、あとコンビニで買ったお昼ご飯が」

「あー、それだと多分盗まれちゃってるね。大会の日とか結構置き引き発生するみたいだから、貴重品はもって歩かないとダメだよ」

慰めの言葉すらなく机に戻って昼食を再開する事務員の態度に、二重に打ちひしがれたような気分になりつつ事務室をあとにする。

ベンチに戻ろうにも脚が重たく感じられて、うつむきながらのろのろと歩いた。

自分でもどれだけの時間をかけて戻ったかわからないが、ベンチに戻ると既に部員たちの姿はなく、顧問が席に座って眼鏡を拭いていた。

眼鏡拭きをポケットにしまい、眼鏡をかけ直しクリアになった視界で慕野を見つけると、少し怒ったように鼻息を荒くしながら駆け寄ってくる。

「おい、慕野！　何やってんだ次の試合始まるぞ。早く来い！」

「あ、すみません……」

どうやら部員たちを先に行かせて待っていてくれたようだが、疲れと気分の落ち込みが重なって、力なく謝罪することしかできなかった。

そのただ事ではない落ち込みように彼の方も何かを察したのか、

一転表情を柔和にしながら心配するような声色で話しかけてくる。
「なんだか顔色が悪いぞ。どうした？具合でも悪くなったか？」
「はい……、少し……」
「あー、そうか。なら午後は応援はいいから、席で休んどけ。これに懲りたら次からはちゃんと早寝して翌日に備えろよ。わかったか？」
「はい……、すみません……」
尋常ではない落ち込みようを慰めるように、ゴツゴツとした大きな手で慕野の背をぽんぽんと軽く叩いたあと、顧問は労いの言葉をかけて部員たちの元へと向かった。
その背中を見送る余力もなく、慕野はそのままベンチに座り込んでうつむく。
踏んだり蹴ったりとはまさにこのことだと今朝も思ったが、あの瞬間はまだどん底ではなかったようだ。幸せが一気に逃げていきそうなほどの大きなため息を吐き。目の端に溜まった涙を拭った。
もう何かを考えるような気力もなく、倦怠感に身を任せてボーっとしていると、やがてがやがやと部員たちの話す声と靴音が聞こえ出す。
ゆっくり顔を上げると、試合に勝ったらしく笑顔の部員たちがこちらへとあるいてくるところだった。
寝不足のことや、今朝も言われた下ネタも絡めてからかってくる先輩、体調を気遣ってくれる先輩、落ち込む慕野への反応はそれぞれだったが、疲れきった彼にはそのどれにも生返事でしか答えることができなかった。
現地解散を予定していたため、部員たちは荷物を持つと思い思いのタイミングで体育館をあとにする。
そういえば帰りの電車賃はどうしようかと、ぼんやりと考えていると、目の前に誰かが歩み寄ってきた。
「ゆー君大丈夫？午後からずっと元気ないみたいだけど」
見上げると、ボタが心配そうな表情を浮かべながらそう訪ねてくる。
なんとか笑顔を作りながら返事をしていると、周りに誰もいなくなっていることに気づいた。
「もうみんな先に行っちゃったよ。立てないぐらい体調悪いようなら先生呼んでくるけど……」
「あ、だ、大丈夫だよ。なんか疲れちゃって」
空元気でそう返しながら重い体をなんとか立ち上がらせる。ボタの隣をよたよたと歩きながら一緒に出口へと向かった。
体育館から出て、傾いた日差しに照らされながら駅を目指す。
駅の入口が近づいて来たころ、慕野は恥ずかしそうにぼそりといった。
「ぼ、ボタ君……、あのさ……」
「うん？」
「明日返すから、帰りの運賃貸してもらえない……かな？」
不安げにそう言いながらボタの顔を見ると、彼はきょとんしながら考え込むような素振りを見せていた。
「それは全然いいけど、あれ？確か今日カバンも財布も持ってきてたよね？」
手ぶらで歩く慕野の姿を不思議そうに見つめながらボタが訪ねる。
慕野は恥ずかしそうに頬を掻きながら応えた。
「あの、一回戦のあとに席に戻ったら失くなっててさ、事務室いったけど届いてなくて……」
「ええー、そうだったの？もしかしてそれでゆー君が午後いなかったのかな」
「うん……。財布と弁当入れてたから、ないと正直きつかったし」

「あれ、じゃあもしかしてお昼まだ？」
「うん……」
「それでそんなに具合悪そうにしてたんだ」
　ボタは納得したように頷きながら、自分のカバンの中に手を突っ込んだ。どうしたのだろうかと慕野がぼんやり見ていると、おにぎりを二つ取り出す。
「じゃあこれ余ったやつでよければだけど、いる？」
　慕野は目を見開いて、二つのおにぎりを食い入るように見つめたあと、再びボタの優しげな顔へと視線を向ける。
「えっ、いいの？」
「うん。僕、梅苦手なのに間違えて買っちゃったんだ。お昼抜きじゃつらいと思うし、あげるよ」
「あ、ありがとう……」
　感動のあまり涙がこぼれそうな気分になりながら、二つの梅おにぎりを受け取った。
　駅前のベンチに座って、再びボタにお礼を言ったあと、頂きますと手を合わせてからおにぎりを頬張る。
「くぅ……」
　美味しかった。今日一日辛い思いをしてお腹を空かした後だからという以上に、想い人であるボタからもらったおにぎりだと思うと、この空腹の中でも食べてしまうのがもったいないと感じるぐらいだ。
「そんな風に美味しそうに食べてもらうとなんだか嬉しいなー。あ、これお茶買ってきたよ」
「あ、お茶までありがとう。明日絶対返すから」
「いいよー、お茶くらい。それよりゆっくり食べないと喉に詰まっちゃうよ」
　そう言ってボタは穏やかに笑った。傾いたオレンジ色の日差しの中で、その笑顔がとても魅力的で、思わず胸が高鳴る。
　おにぎりの味が、喉を潤すお茶が、そして何よりボタの笑顔が渇いた心に染み渡る。
　今度は嬉しさに目頭が熱くなってくる。それをこらえている表情が、梅干の酸っぱさを耐えているように見えたらしく、ボタが「あはは」と楽しげに笑った。
　そんな笑顔を自分に向けてくれることが嬉しくてたまらなくて、慕野はぼそりとつぶやく。
「ありがとう……」
　そして心の中で、『好きだよ』と付け足した。まだ直接伝える勇気はなかったが、少なくとも今この瞬間は彼の笑顔と優しさに触れられるだけで、幸せでたまらなかった。

季節は秋になり

想い人と部活仲間という関係に妥協しながらも

同じ時間を過ごせる日々に充実を感じていた

あっ慕野じゃん

ボタちゃんなら

部活仲間
瀬谷（せや） 心美（ここみ）

たぶん…帰っちゃったよ

え？

6限が終わったあと…

あっ

脳内彼女の返事でも書いてんのか？

ぶっ

壁紙がデブのおっさんて

趣味悪すぎるだろ！

えっボタちゃんガチホモ？

つかこのキメェおっさん誰だよ

あ

あれボタちゃん怒っちゃった？

まぁ怒んなって

ちょっ…おーい

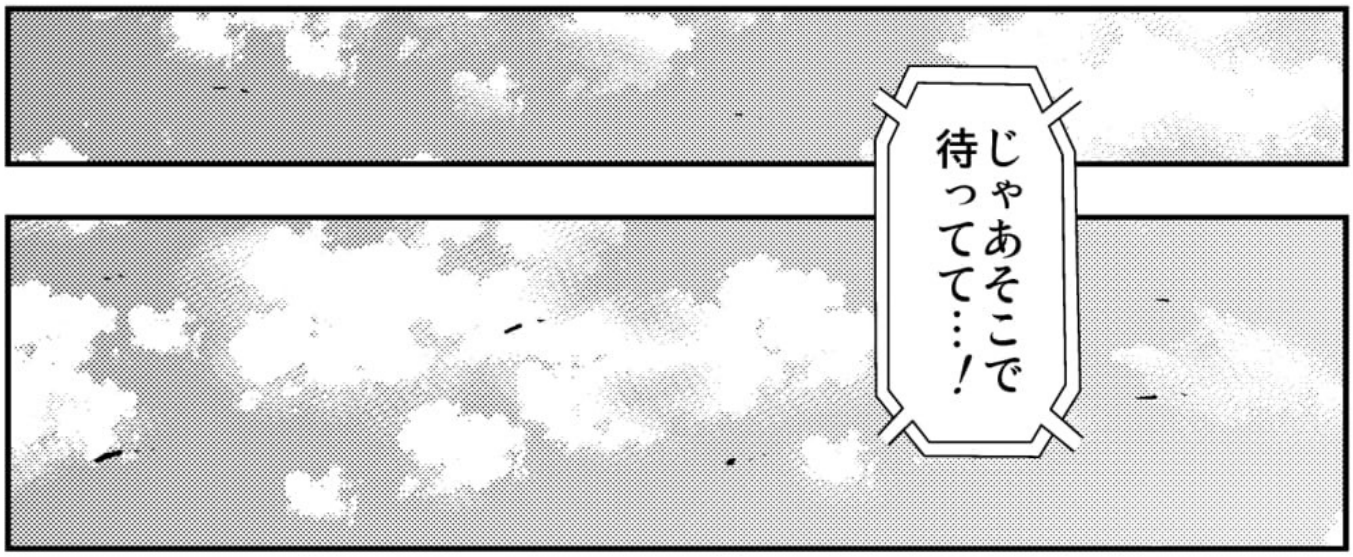
それでそのまま帰っちゃったみたい…


何分前ッ!?
瀬谷さん
ごめん!!
…え
10分くらい前
…だよね?
う…
うん…
今日オレと
ボタ部活
休みで!!
えっ?
ちょっとぉ


ゲーンゲーン
ゆー君？


あっ…ボタ君電車乗っちゃった!?
えっ…まだ橋渡ったとこ…
はっ
あ…あのさ…オレん家でちょっと話聞かせてくれない？
はっ


このすぐ近くだからさ
…何かあったみたいだし良かったらその…
…うん


じゃあそこで待ってて…！


お邪魔します


一人暮らしいいね
あっウチと同じ鍋がある
…


…
あっ
ウチと
同じテーブル
だ～


あっウチと
同じコップ
…
なんか
恥ずかしいから
やめて？


…ところで
ボタ君って
その…
もしかして
なんだけどさ
男の人が
好きだったり
…するの？


あっいやご…ごめん!!
バカ…ッいきなり何聞いてんだよオレは…ッ!!
ほら…女子の瀬谷さんから放課後のこと聞いて酷いな~って!!


クソ…ッ家に呼んでまで何がしたいんだよオレは
そりゃあボタ君がもしそうだったらそうだったら…


…んなワケないよね~アイツ等ウザ過ぎ…
ううん…


ゆー君が言ったので合ってるよ


え…


これが
みんなに見られちゃった画像…


ゆー君だから教えるけど他の人には内緒だよ！
…え？


えっこの人どーいう人なの？


えと…その…大事な人？
もじ
もじ
もじ
もじ
…ボクはコーテツさんって呼んでるんだけど…


あの…えーと一ヶ月くらい前にね
ネット通じて知り合ったんだけどね


年は少し離れてるけど全然そんな感じなくて…
ギリ…

駄目だよッ!!!

そんなネットで知り合うとか!!

おい…何言ってんだよオレ!?

えっ

そっそんな事ないよ?

優しくしてくれるよ?

やめろよ!!!

いや表面上優しい人なんてたくさんいるし…

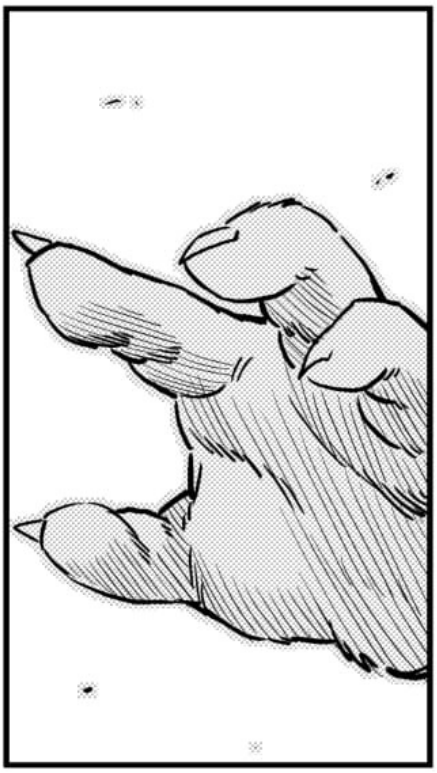
それに男同士だと体だけが目的の人も多いって聞くし…

やっ…


コーテツさんは
そんな事しないよ
会ったこと
ないのに悪口は
言わないで…
付き合う前に
約束して
くれたから…
違うんだ…

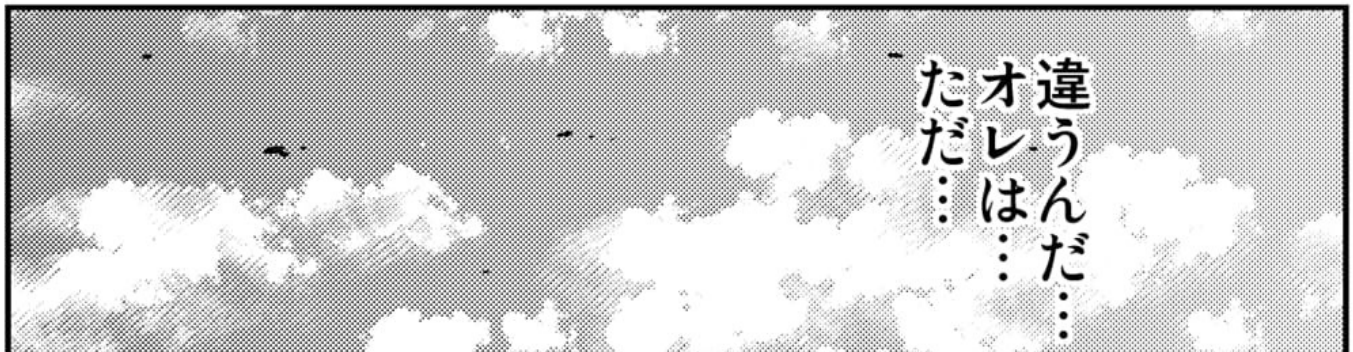

最初の半年は
そういうコト
しないって…
そういう目的
じゃないって
違うんだ…







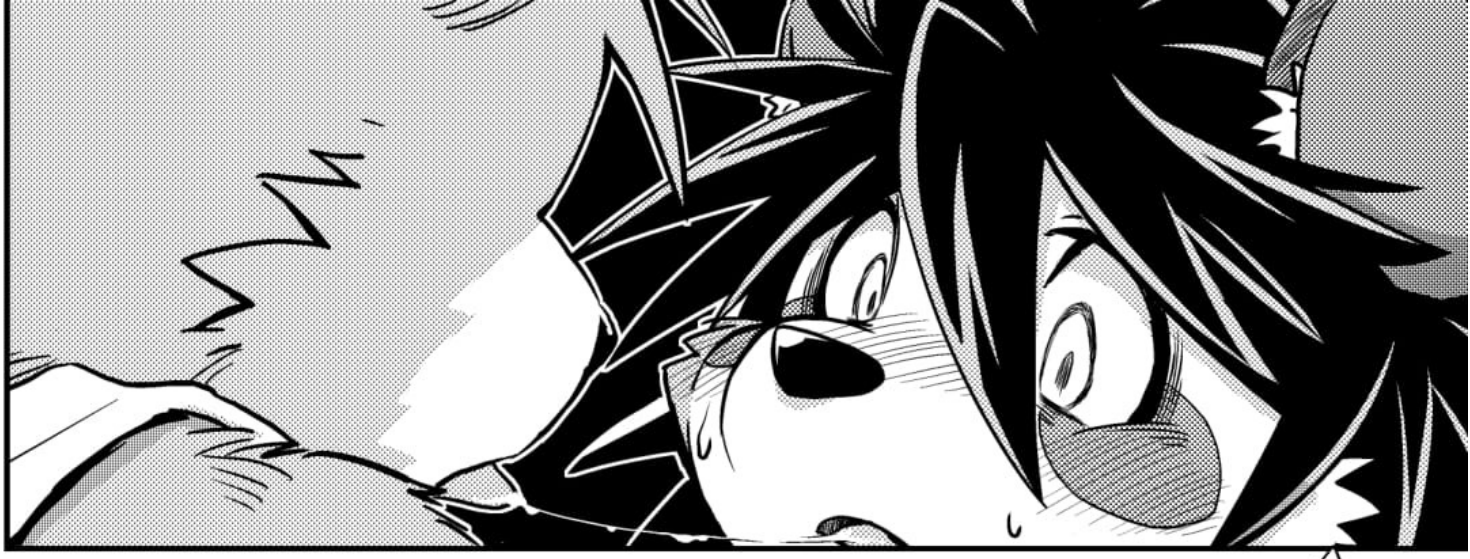
クソッ…クソッ…クソッ…




コーテツのアパート
Rêveur IV
ボタ君がこんな時間に来てくれるなんて嬉しいなぁ
ボタの大事な人
早乙女（さおとめ） 鋼鉄（こうてつ）


この間話したゆー君のこと覚えてます？
確か同じ部活の友達でしょ？どうかしたの？


実は今日その友達とケンカしちゃって…
そっかそっか辛いよな〜そういう時って
よしよし
それでウチに来たんだな
ぽんっ
じゃあ
オレが慰めてやるよ
えっ
ちゅっ




なっ
何してるんですか!?


何ってちょっとチューしただけだよ？
ぬぎ
ぬぎ

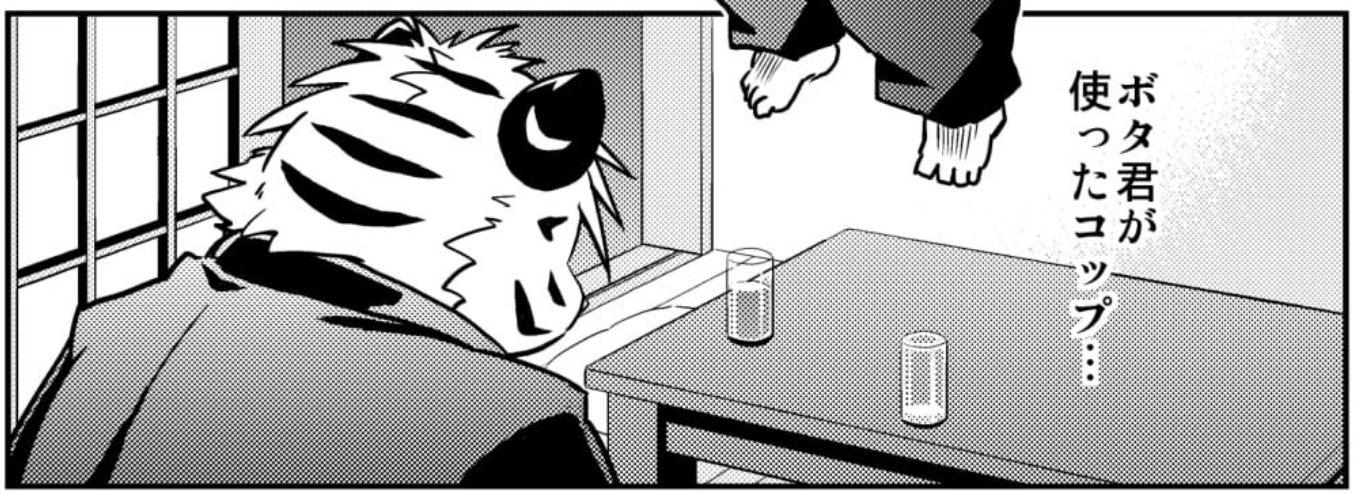

そっ…
そういう目的じゃないって…
んー？
一ヶ月も経つしチューくらいいいじゃん？


ボタ君はいちいち純粋で可愛いなぁ
ボ…
ボク今日は帰ります…ッ！


わっ
まあ落ち着けって
がしっ…
ホントは
オレに慰めて欲しいから来たんだろ？



ボタ君の飲みかけ…



ボタ君が使ったコップ…



ボタ君…あの人ともうキスくらいはやっちゃってるのかな…

ペロ…



そっ…

ボタ君と間接キス…


はぁ
はぁ
ほらもっと
舌出してみ？
ズサッ
はぁ
はぁ
ボタ君よぉ
はぁ
何が「そういう
目的じゃない」だよ
はぁ
オイオイ
ちょっとチュー
しただけで
おパンツ
ベトベト
じゃねーか
ニヤ


小っせーくせにすっげぇカタくなってるぞ？
ちゅっ♥
はあ
ちゅっ♥
もうこれ以上やめて下さ…
あっ…
はあ
ヤベェよボタ君
はあ
すっげぇ
エロい
あっ♥
はあ
はあ

ボタ君も…いつかあの人と…



オレが…最初の人になりたかった…



オレも…オレも…ボタ君と…

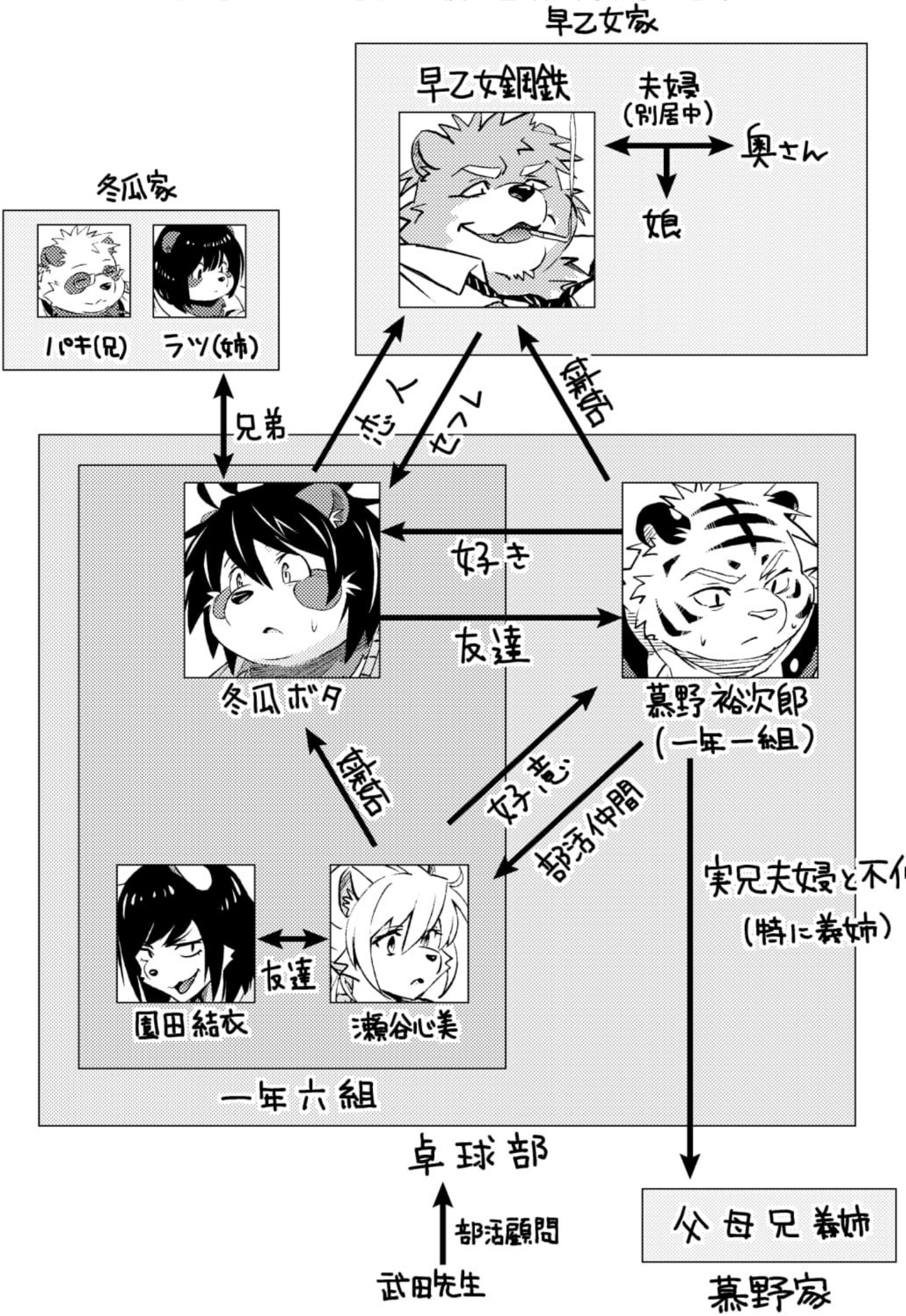



あーあァ
ぬちゅ♥!!
新品が
どんどん
ヨゴされて
くなぁ
ぬちゅ♥
あっ♥
あ
ほらもっと
声出せよ!!
はぁ
あっ♥
ギュゥ…
はぁ
あっ♥
あっ♥
ズプ♥
ズプッ♥
ズプッ♥
はぁ
あっ♥
あっ♥


あー
ヤベェ…
イキそう…
あ…ッ!!
ビュルル
ああ…ッ!!
はぁ
あっあっ
あんっ
はぁ
はぁ

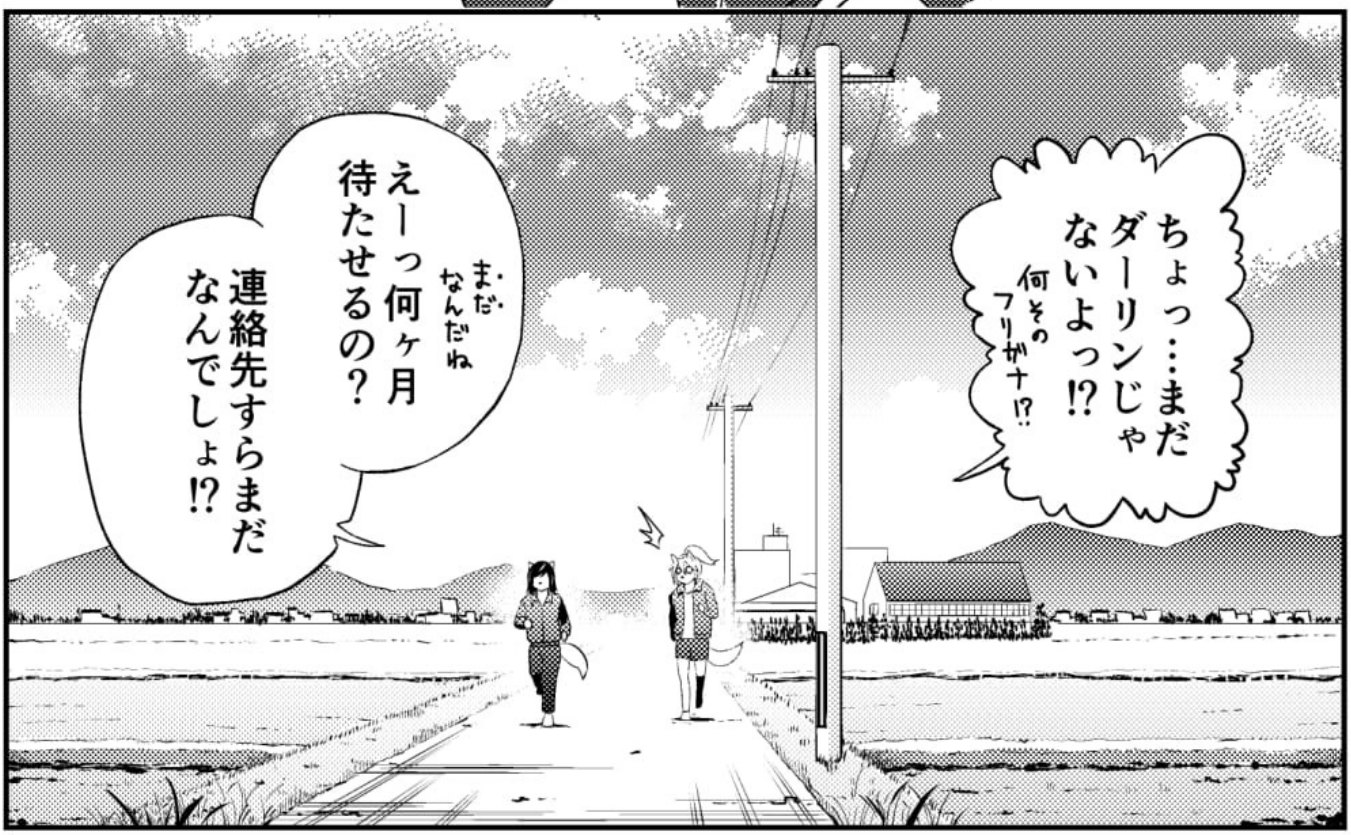

ヴーン
ヴーン
ヴーン
着信中
母
ヴーン
ヴー:

ここまでが2014年の夏コミで出した「ブルーにこんがらがって」から
ゆー君とボタの物語の再録でした～。
何回再録するの？って話ですね。多分これが最後です！！！
それはさておきこれまでと、この後の冒頭の簡単なまとめです。

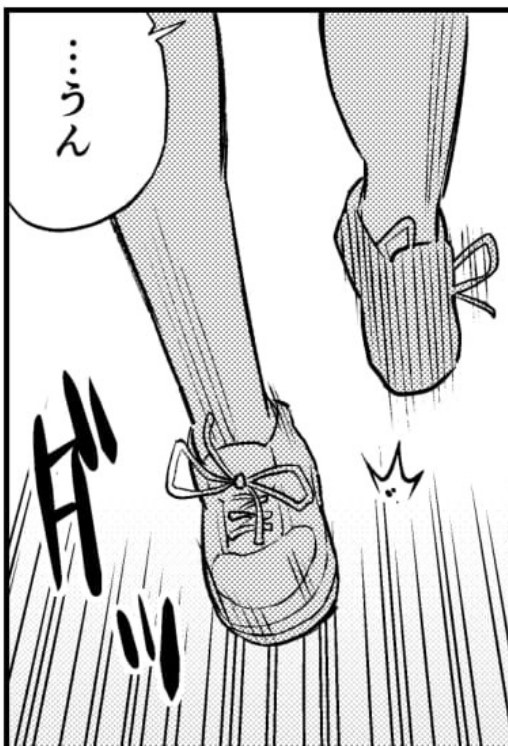



部活の事で話あるんですけど…
…慕野君は？
職員室
あー…今日も休みだよ
連絡先とか聞いてないの？
…はい
んー
卓球部でしょ？武田先生に伝えとこうか？
あっ…いえいいんです…


それで
慕野（ダーリン）は今日も休みだったの？


ちょっ…まだダーリンじゃないよっ!?
何そのフリガナ!?
えーっ何ヶ月待たせるの？
まだなんだね
連絡先すらまだなんでしょ!?


というか慕野って童貞っぽいし余裕だろうに
そういえばボタちゃんも来なくなっちゃったよね


…うん

えーと

休み挟んで
もう5日も
見てないのか

二人共
どうしてる
んだろうね

ん？
二人共？

男二人、
同じく欠席、
何も起きない
はずがなく…

すぐかけ算するのやめなさーい!!

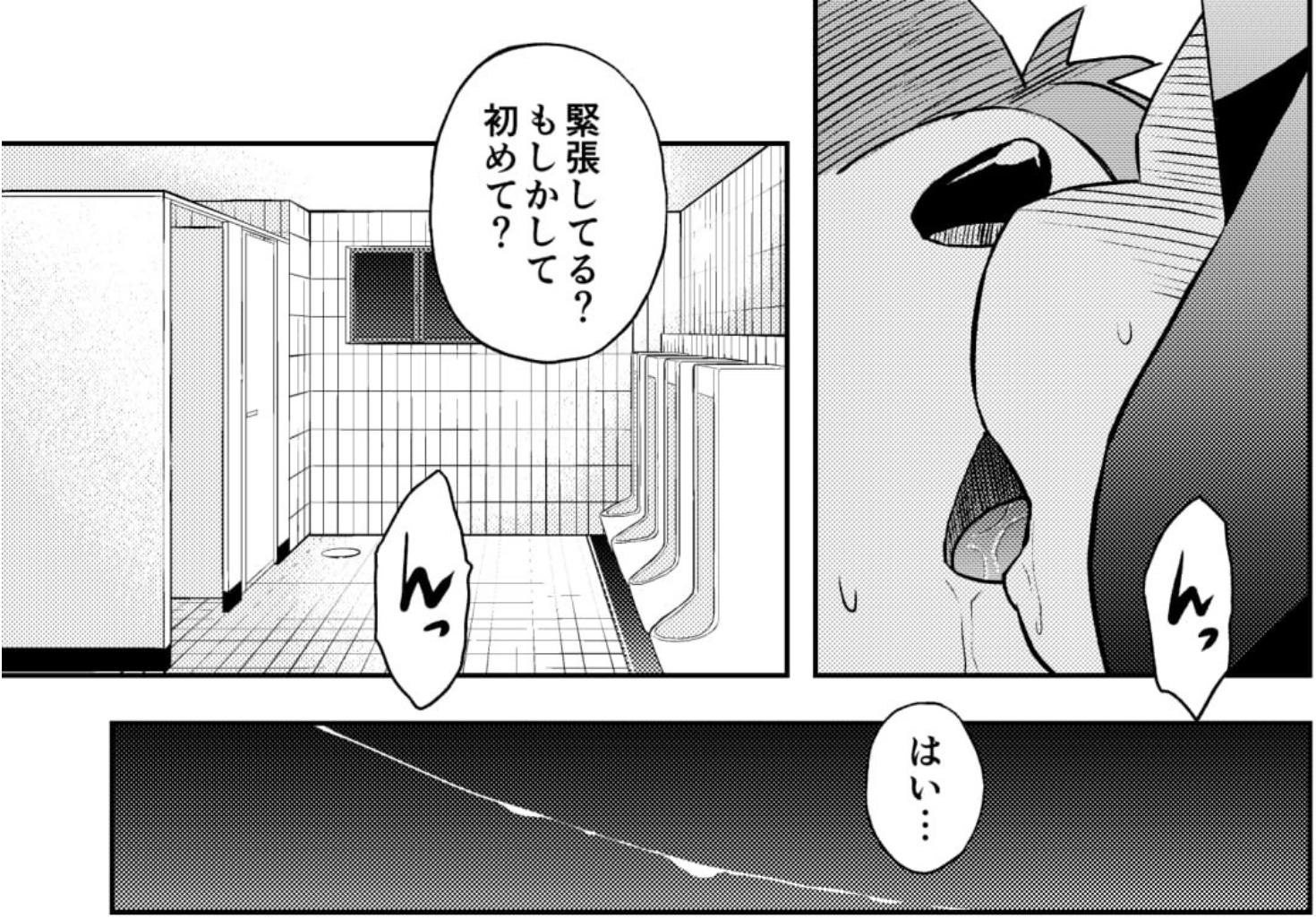
――って
感じの展開に
なってたり
して～

この場合
慕野は
受けよりの
攻めかな～

えっ？

ちょっと
心美（ここみ）？


ケン君
写真で見るより
可愛いね
ちゅー
してもいい？
は…はい
んっ
ちゅっ
ちゅっ


緊張してる？
もしかして
初めて？
んっ
んっ

はい…


へぇそっか
こんな所じゃ
なんだし
うち来る？

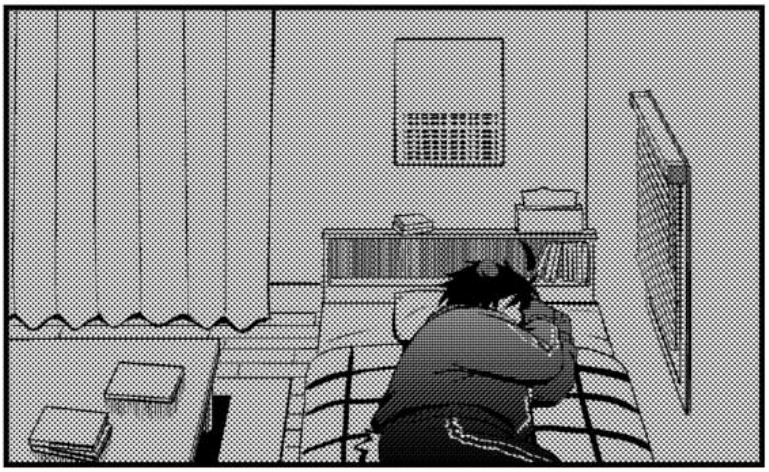

…はい
親御さんは
大丈夫？

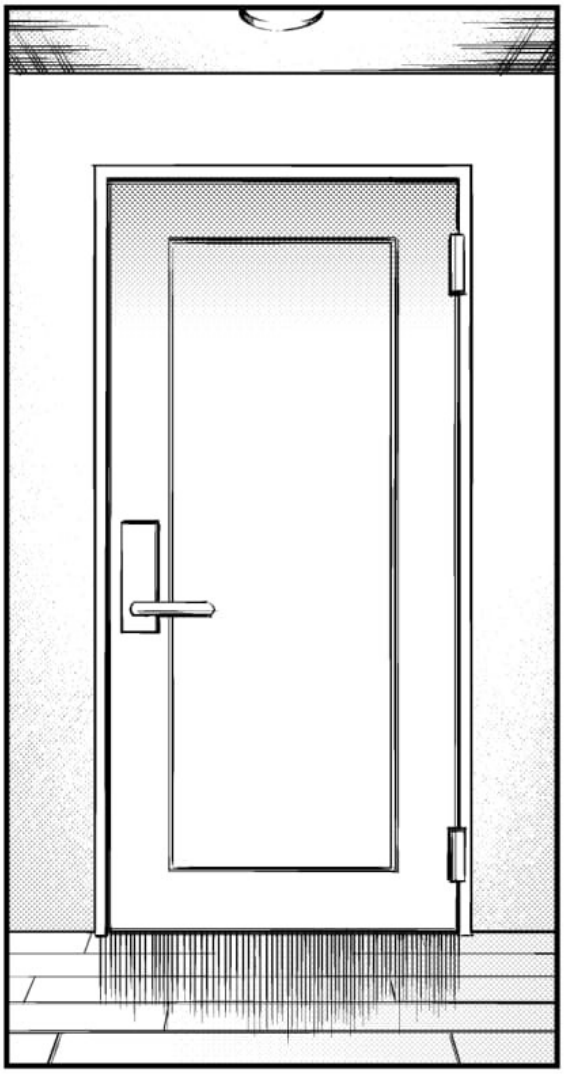

…はい
塾の日なので


ごちそうさま
肉余ってるよ
ボタの
じゃない？
あ
そう
ラツ姉に
あげるよ
じゃあ
もーらい
ところで
ボタ
お前が
休んでること
まだ
父さんにも
母さんにも
言ってないん
だぞ？

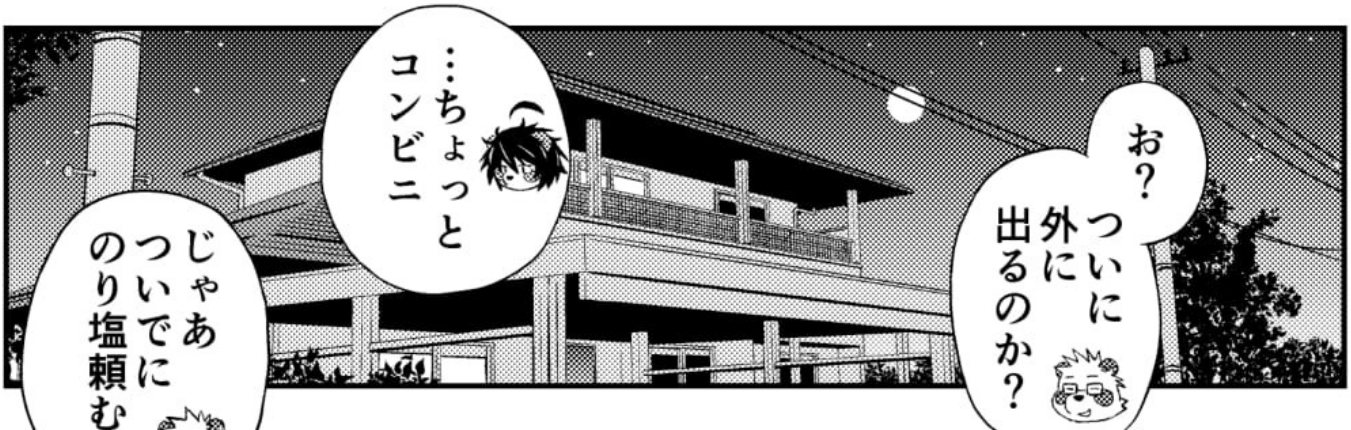
カチャ…

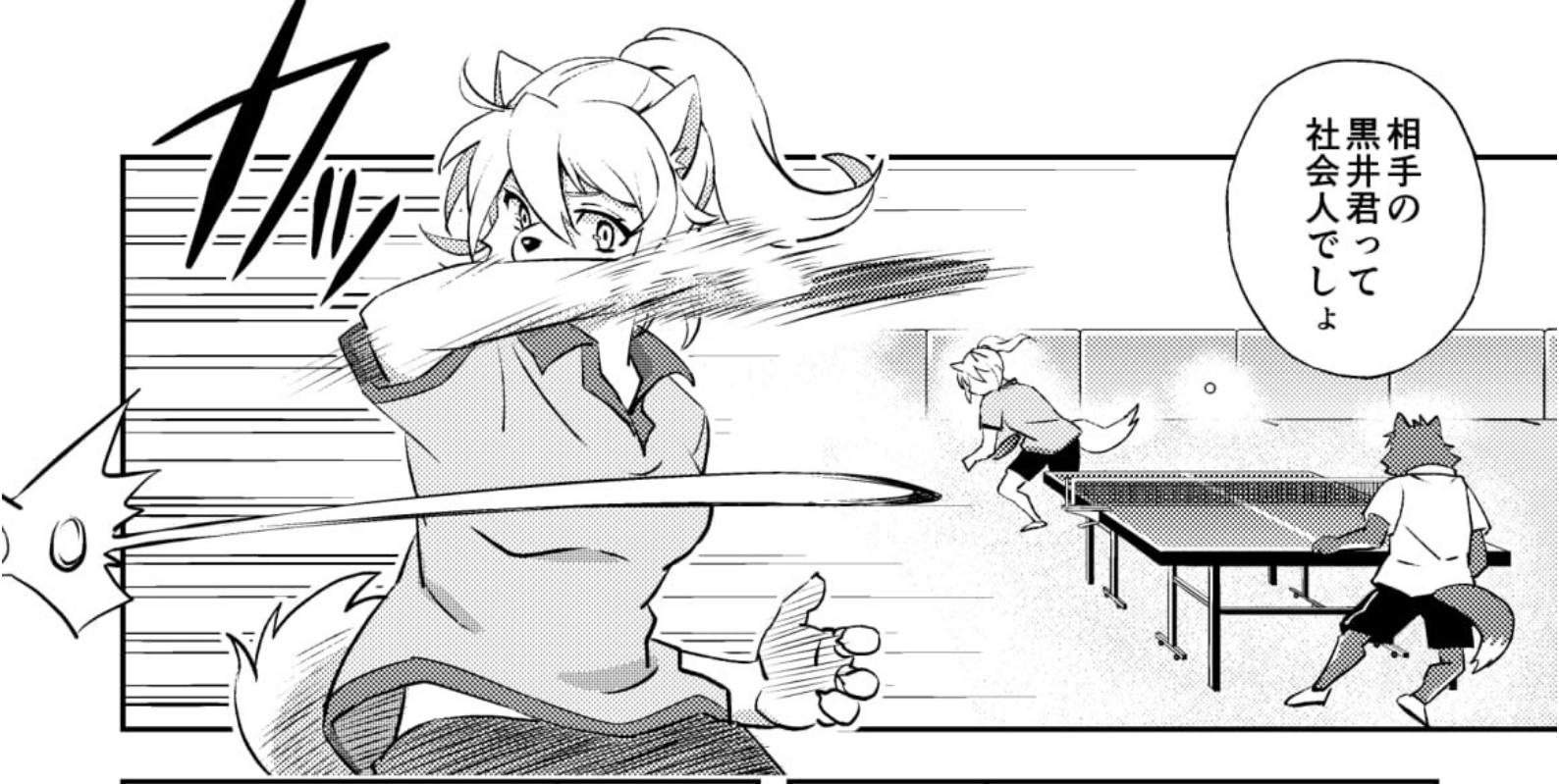
うん…
今日自分で
言うよ…





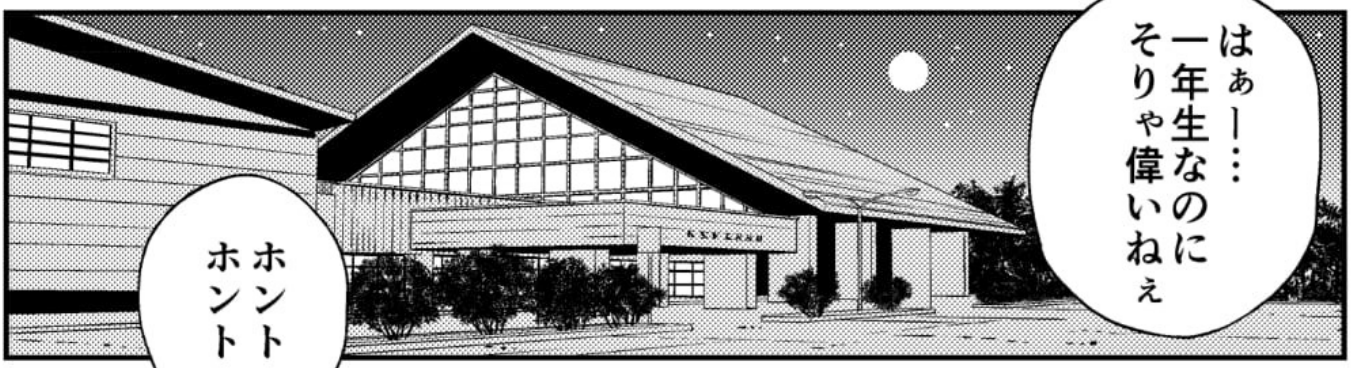


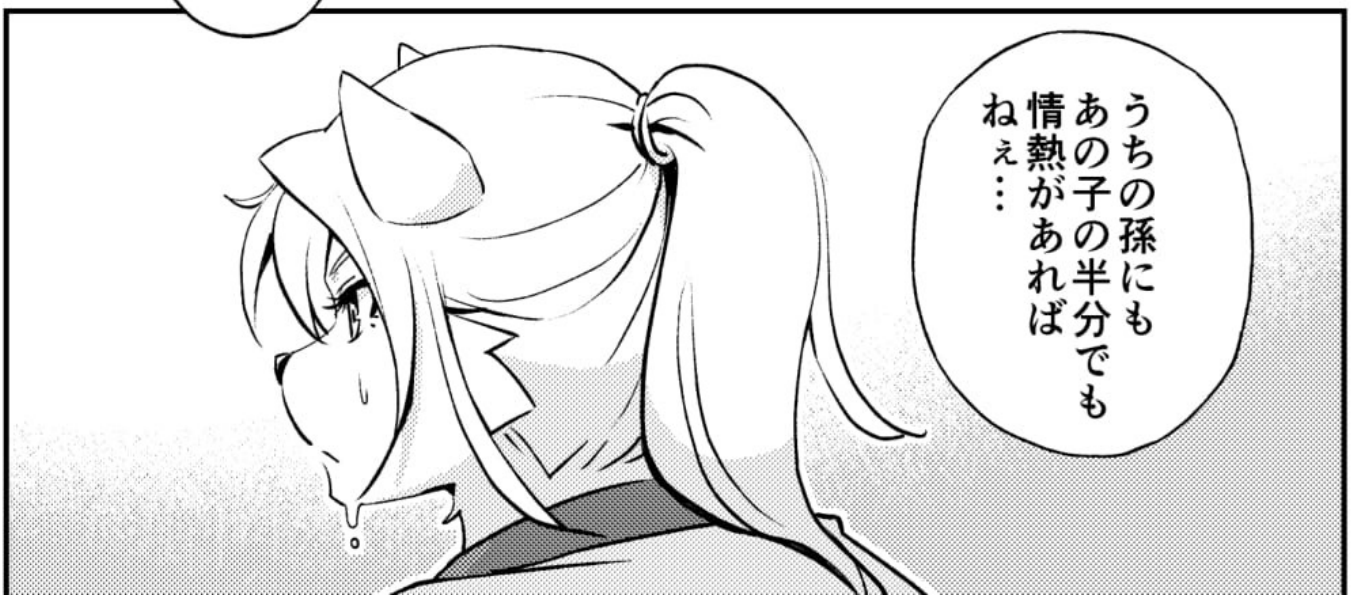



相手の黒井君って社会人でしょ


心美ちゃん部活の後なのに気合入ってるねぇ


次の大会のメンバー入りたいんだって


はぁー…一年生なのにそりゃ偉いねぇ
ホントホント


うちの孫にもあの子の半分でも情熱があればねぇ…

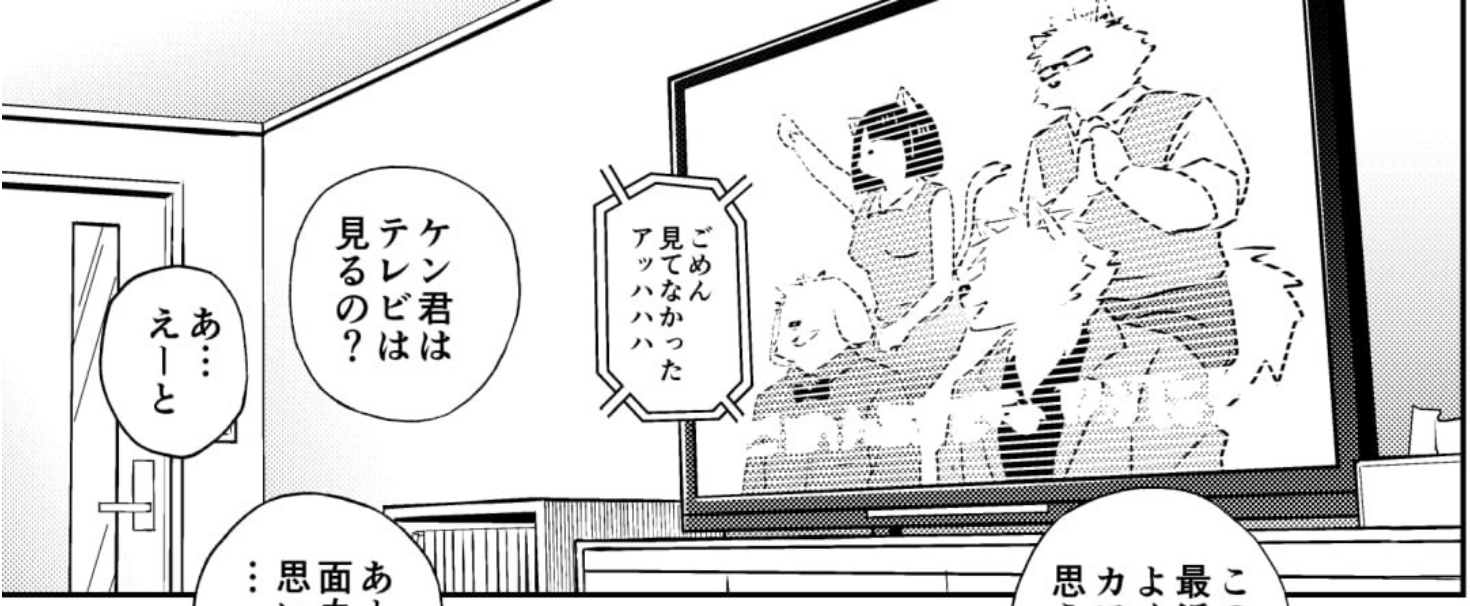

ケン君もコーヒー飲む？
あ…えーと
Creaming
GRAND CAFE
コトこ
コーラとかウーロン茶もあるけど
ずずず
あ…じゃあウーロン茶を…
ほいつか何でフード被ってるの？
コロン
コロン
あ…すみません


サササッ
あまり人に見られたくなかったので…
コト…
あーそりゃそうだよね

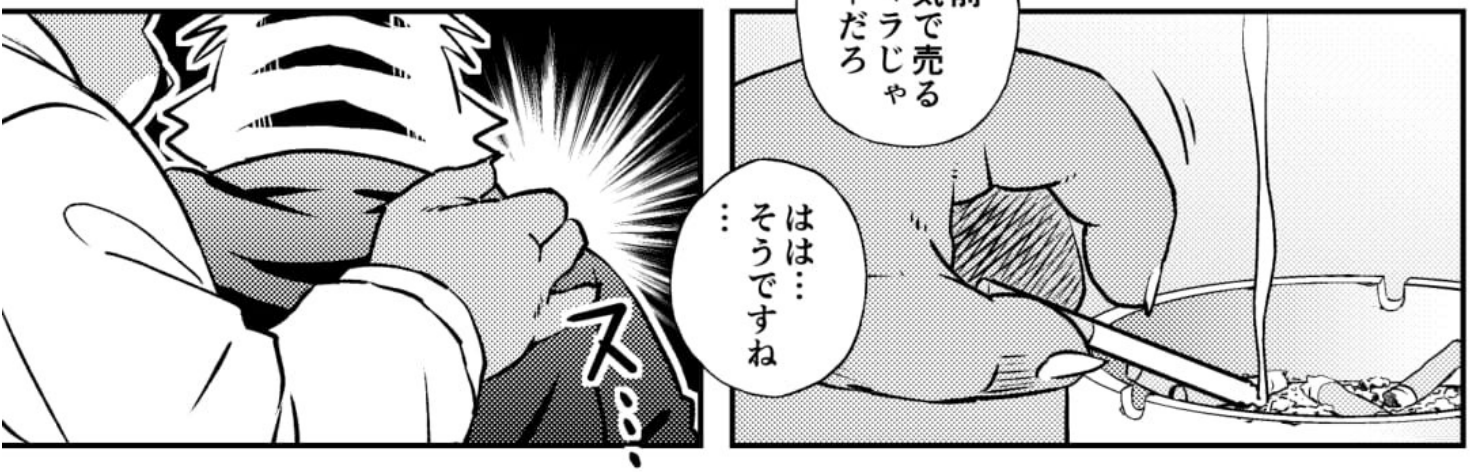

タバコ吸ってもいい？
ど…どうぞ


ケン君も吸う？
え…？


ハハ冗談だよ


ごめん
見てなかった
アッハハハ
ケン君は
テレビは
見るの？
あ…
えーと


この女の子
最近
よく見るけど
カワイイと
思う？
あー…
面白いとは
思いますけど
…
この子最近
絶対おっぱい
いじったよな


お前
色気で売る
キャラじゃ
ねーだろ
はは…
そうですね
…
ス…


ドクン
ドクン


二日前
ピンポーン
ガチャ…
ごめん…急に
…ううん

…元気？

え…

…学校休んでるんだもんね

元気なわけないよね

ごめん…!!

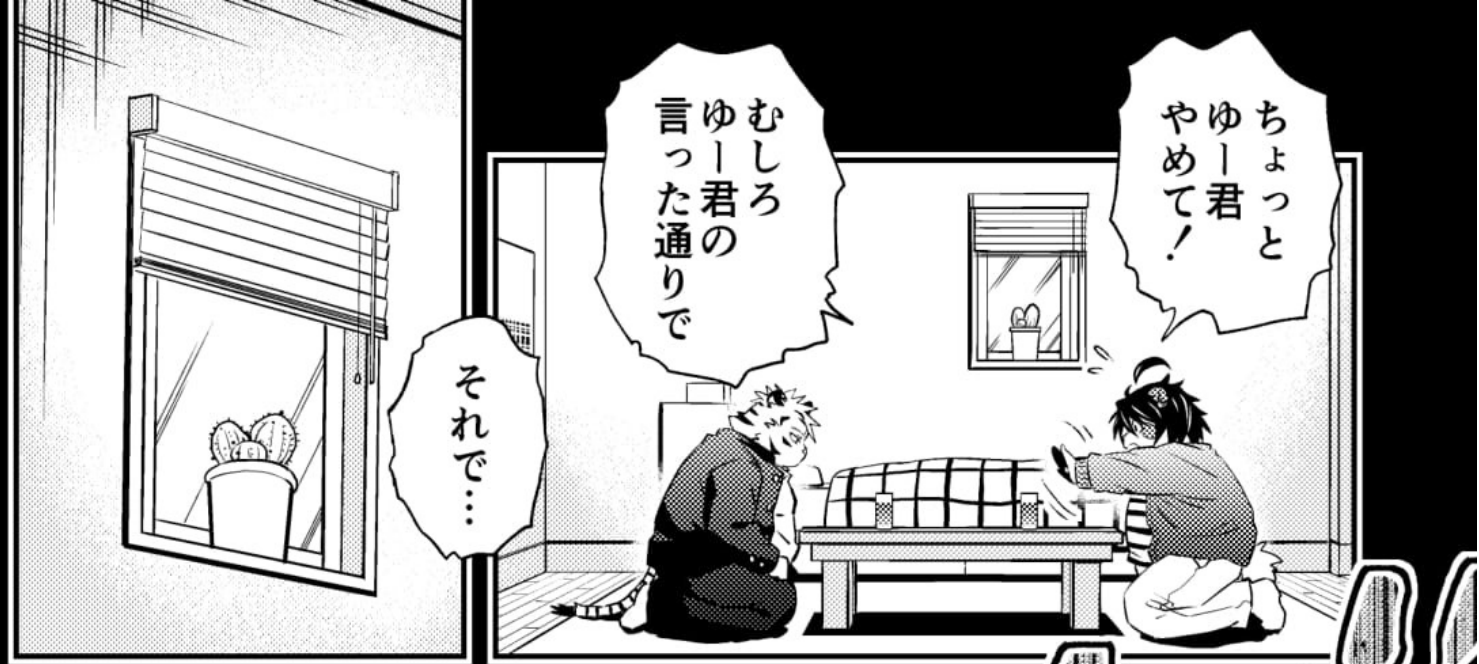
ボタ君が決めた人なのに

コーテツさんに会ったことも無いのに…

そのせいで学校まで休ませちゃって…ごめん!!

…え？

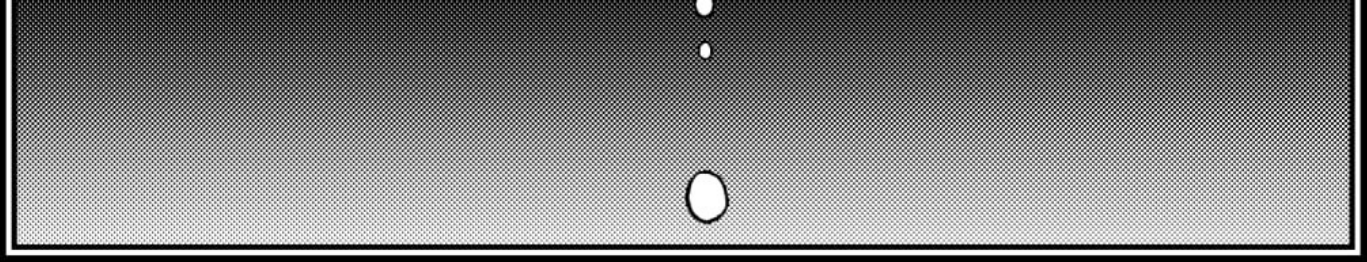
その…悪く言っちゃって…


ちょっと
ゆー君
やめて！
むしろ
ゆー君の
言った通りで
それで…


んっ

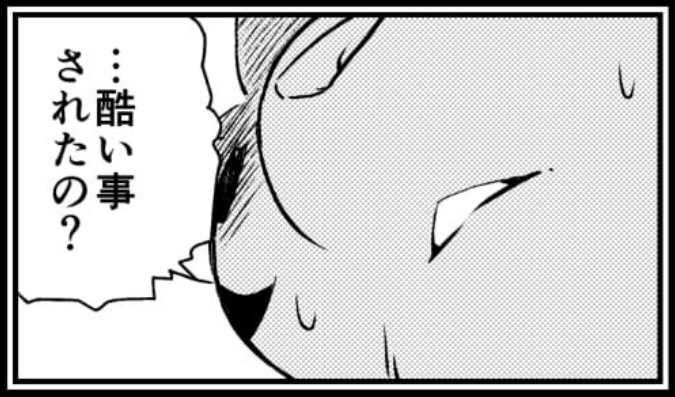

ボ…
ボタ君!?


ふーっ
ふーっ
ふーっ
ふーっ
ふーっ
コーテツさん…
ゆー君が言った通りだった…！
ごめん…ね…
ごめん…ね…




ごめんね…


コク…


…酷い事
されたの？


ゴゴゴ
じゃあ
謝らせよう


……ッ


ソイツに
一泡吹かせて
謝らせよう


だから教えて
ソイツについて
…
…でも
簡単に謝るような人じゃ…
…うん分かってる
……
……コーテツさんには…
奥さんと娘さんがいるの…
!?


少し前から奥さんとは別居中な上離婚の話でモメてて
そんな時にボクと出会ったの
それで半年以内に決着をつけるって約束で――
それまでそういう事はしないって約束で――
付き合い始めたんだ…

でも…


…ねぇコーテツさん…
ん？


奥さんとの話はどうなったの？


ああ
弁護士にも
相談したけど
やっぱり
現状維持だな
結婚してると
社会的信用も
違うしな


え…
…じゃあ
今のは…


所詮
男同士なんて


ぎー
お互い
気持ち良く
なりゃそれで
いいんだよ

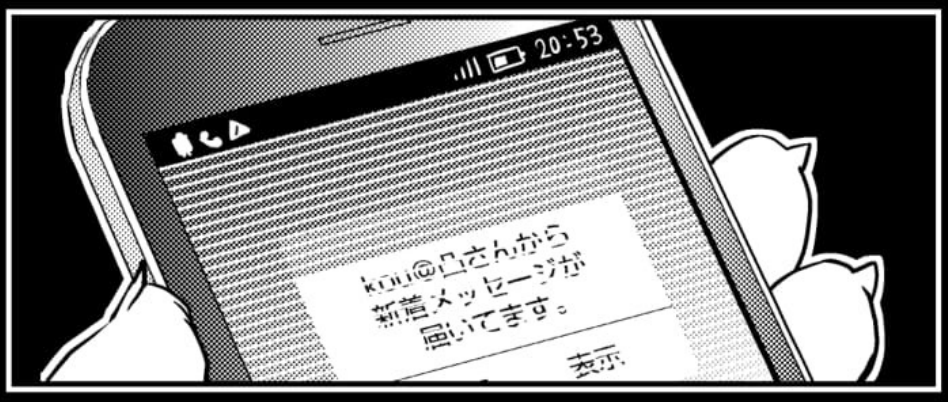

え…
そんな
約束は…

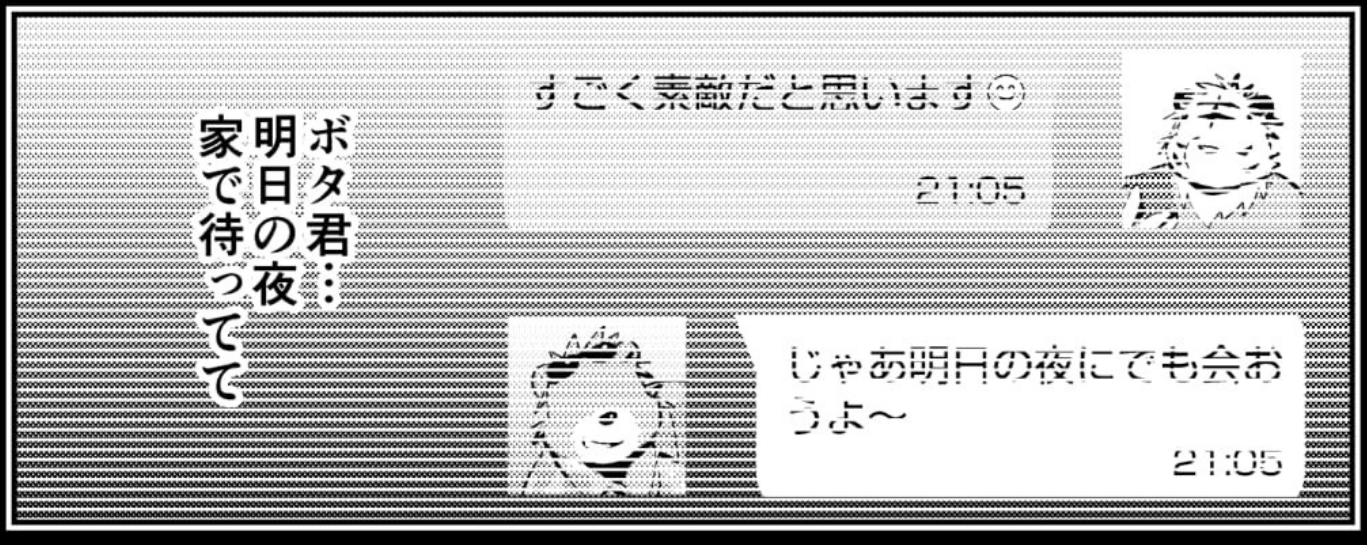

はあ…
面倒くせえ
反応するねぇ
そんな…
だって…
あー
面倒くせえ
帰れよ
もう来なくて
いいぞ

約束は守られなかった…


ソイツとはどうやって出会ったの？


出会い系のアプリで


20:53
kou@Pさんから
新着メッセージが
届いてます。
表示


ボタ君…明日の夜家で待ってて
すごく素敵だと思います☺
21:05
じゃあ明日の夜にでも会おうよ～
21:05


必ずソイツに謝らせるから…!!


ケン君は週に何回くらいオナニーしてるのかな？
えーと…
言えない程してるのかな？
クソ…ッ 顔近づけるな 気持ち悪い

お腹キツいでしょ
カキャ
カキャ
クソ…ッ


一回目（ファーストキス）だけじゃなく二回目もコイツだなんて…
クソ…ッ!!


耐えろ…
耐えろ…ッ！
はぁ…
感度上げようか
……
はぁ…

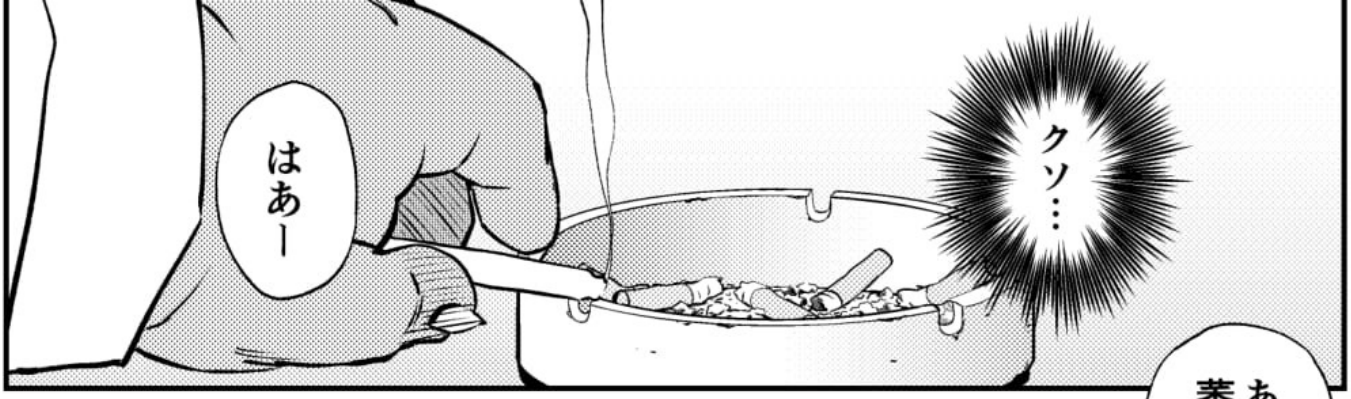

ほれ
…え？


これ
感度良くなる
サプリ
ほれ


大丈夫
血行良くして
感度上げる
だけのサプリ
だから
え…いや

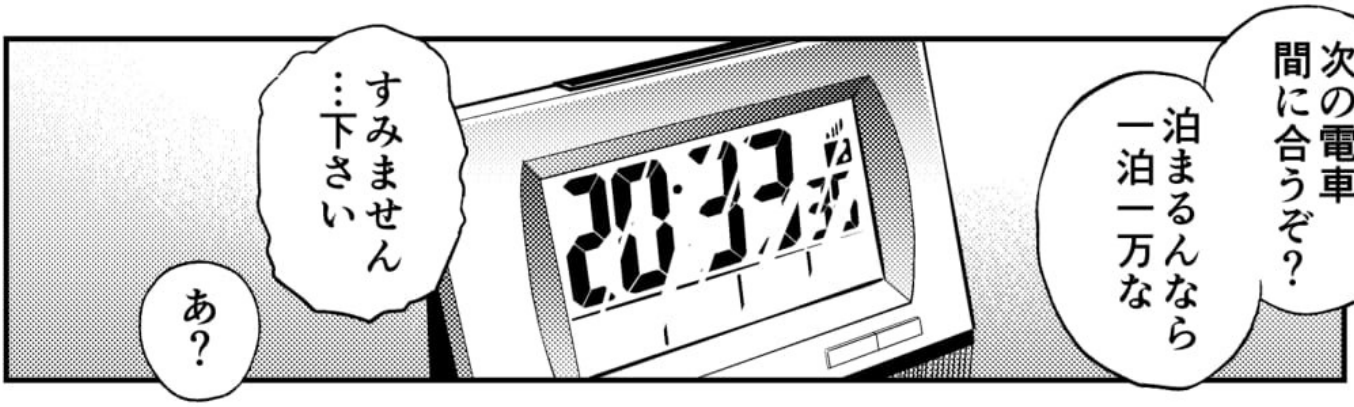

大丈夫
だから
あの…
それは
ちょっと…
ほら
いいから
…な？
…
すみません


あー
じゃあ
帰れや


はあー
クソ…

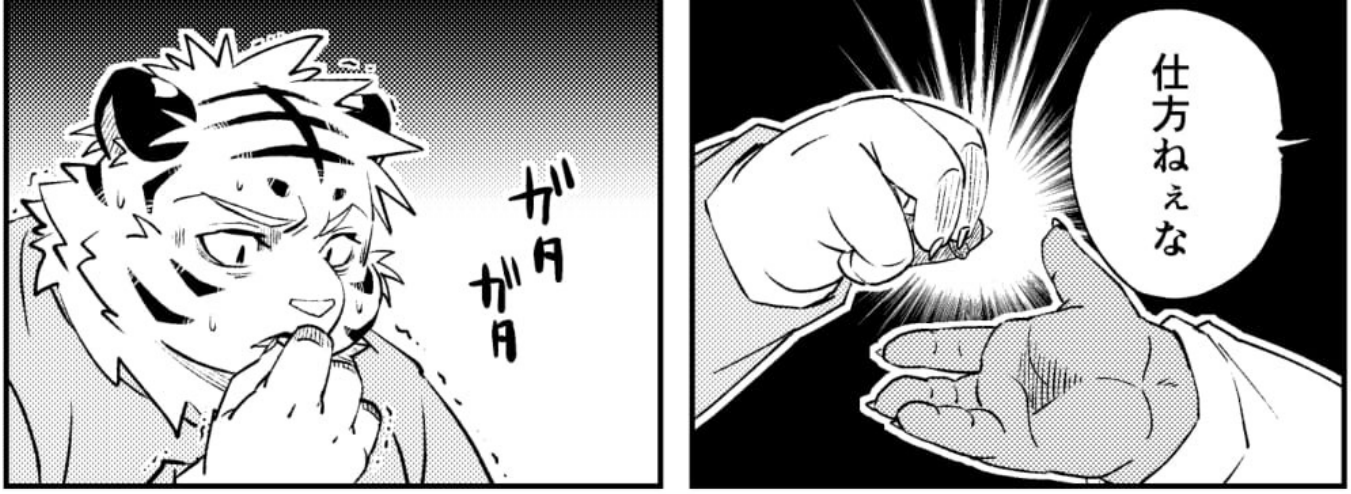

あーあ
萎えたわ
クソ…
耐えろ…


すみません
…
ガ
ガ

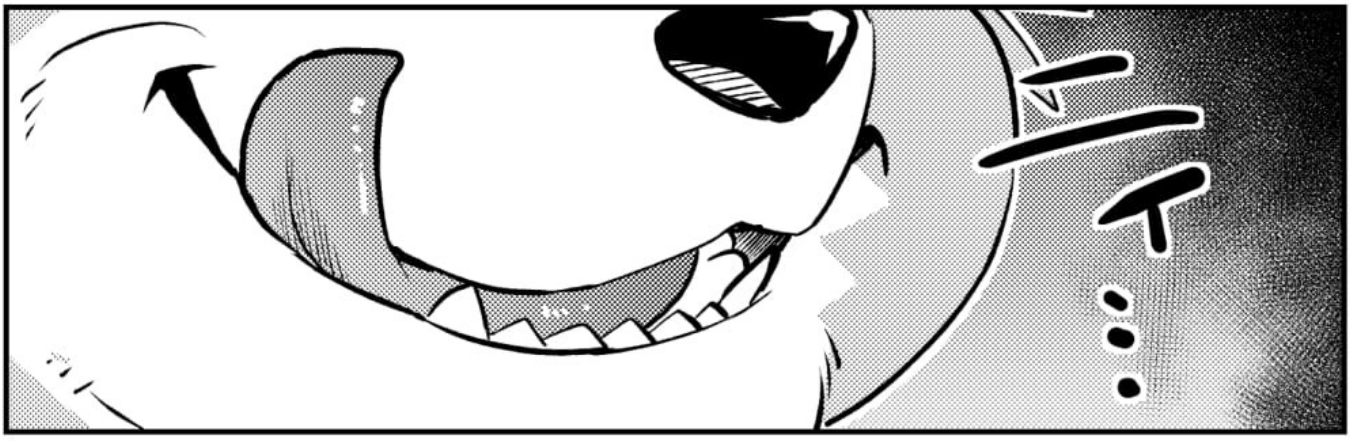

次の電車
間に合うぞ?
泊まるんなら
一泊一万な
すみません
…下さい
あ?


ある程度は
覚悟して
来たんだ…!!
最近のガキは
人にものを
頼む時に
何て
言うのかも
知らない
のか?


お願い…
します…
オレは…
まだ…
聞こえねえ
な?
お願い
します!


仕方ねぇな
ガタ
ガタ


ゴク…
ゴク…


ニィ…


カタ
カタ
自分の意思で
誤飲んだな
でもまだ
許してねーぞ


しゃぶれ
ス…
…はい


クソ…ッ
クソ…ッ!!
チュプ…
おー
もっと舌
使えよ舌ァ
チュプ…


そうそう
言う通りにしてりゃあ良いんだよ
あれ…？

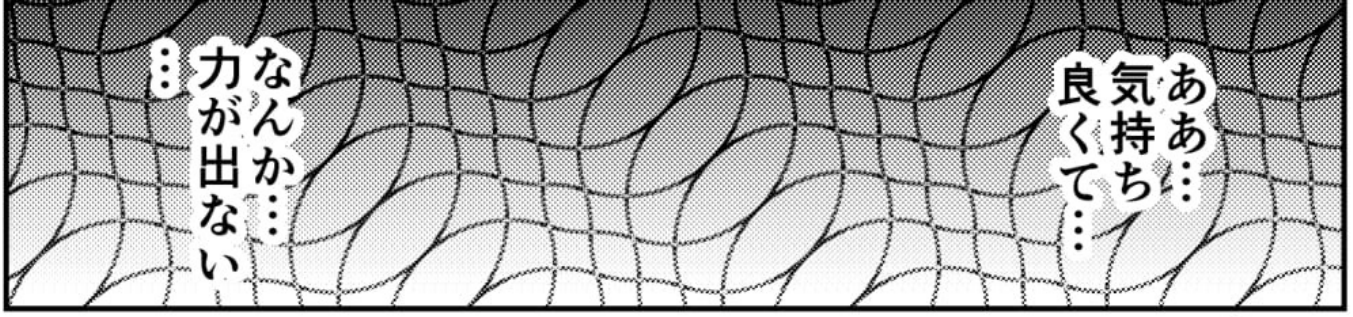

なんか急に頭ボーっとしてきた…？


ハーン
あれ…？
ハーン
ハーン
たっぷりと可愛がってやるよ


ん…
ペ
なんだよ
今の…
ペチョ
ペチョ
ん…
何でこんな
奴の前で
ビクッ!!
ん…
スル…
オレは
こんな声
を…!?


おい…
ウソだろ
…!?
ビク
ん…


ビリ
ビリ…
ん…
スル…
チンポ
こんなに
してよぉ
ん…
やっぱり
さっき
飲まされた
アレ…
ん…
ん…
ほぉら
男を捨てて
声出してみ？
オレに
身も心も
委ねてみ？
やべ…
なんか全身
温かくて
気持ち…
良くなって
きた…


ああ…
気持ち
良くて…
なんか…
力が出ない
…


ヌチュ…
抗う気力も
湧かない…
ヌチュ…


あぁっ
ビクッ
ビクッ


…もう
はぁ
どうなっても
いいや…
はぁ
はぁ


はぁ
あーもう
我慢できねぇ


ボタ君…
ごめん…
ピト…


いただきまぁーす
あっ♥
あっ♥
あっ♥
パチュン
良い音色じゃねーか
もっと鳴いてみ？
あっ♥
パチュン
んっ♥
あんっ♥
んっ♥
オレ…


ボタ君に
酷いことした
ヤツから…
あっ♥
ヌッチュ
ヌッチュ
気持ち良く
されてる…
あん♥
パチュン
パチュン
パチュン
ああ…
んっ♥
ビクッ
ビクッ

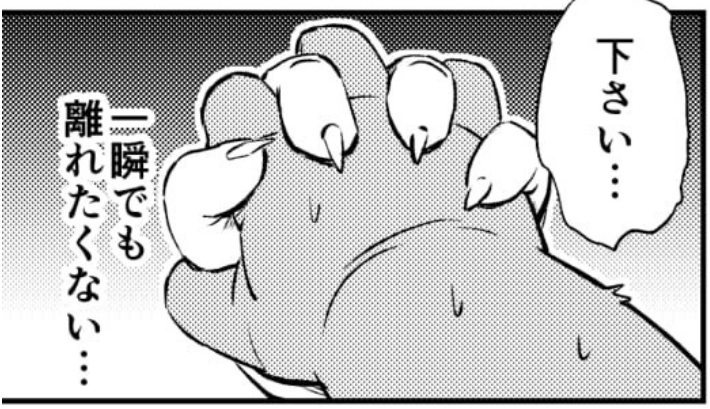

気持ち良い…
あっ♥
中で
動かれる度に
あっ♥
幸せな気分が
やって来る…


繋がるって
こんなにも
気持ち良い
んだな…
あっ♥
パチュン
あっあっ♥
パチュン
あぁ♥


パン
パン
パン
どこに出して欲しいんだ？ン？


何だ？
言わないと外に出しちゃうぞ？
ひとつになりたい…
ふるふる
ン？
首振るだけじゃわかんねーぞ？


イヤだ
そんなの寂しい…
中に…


下さい…
一瞬でも離れたくない…


イイ子だ
たっぷり仕込んでやるからな
肉体も…
体液も魂も
全部…全部
ぐちゃぐちゃに混じり合いたい…


おっやべ…
ビクビクビクッ
あ
ちゅっ♡
ちゅっ♡


はぁ…
はぁ…
はぁ…
ヤロォ…
はぁ…
はぁ…
はぁ…
はぁ…
ぴく…
ぴく…
ゴチソウサマでした♡



オレ…何やってんだよ…



オレ…身も心もアイツの良いように…



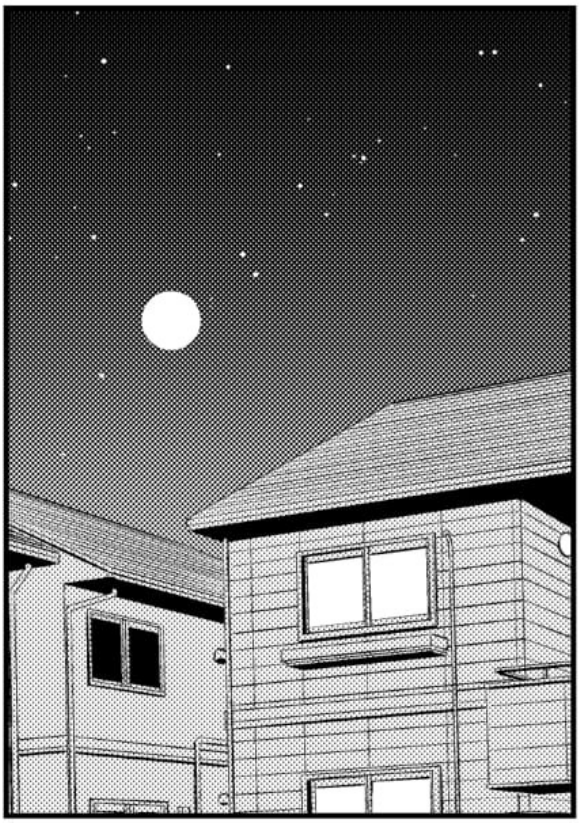


オレ…アイツと一つになりたいなんて…

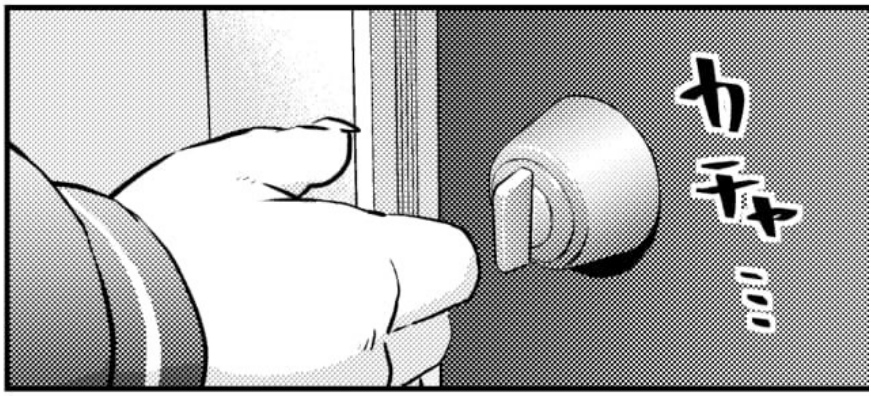


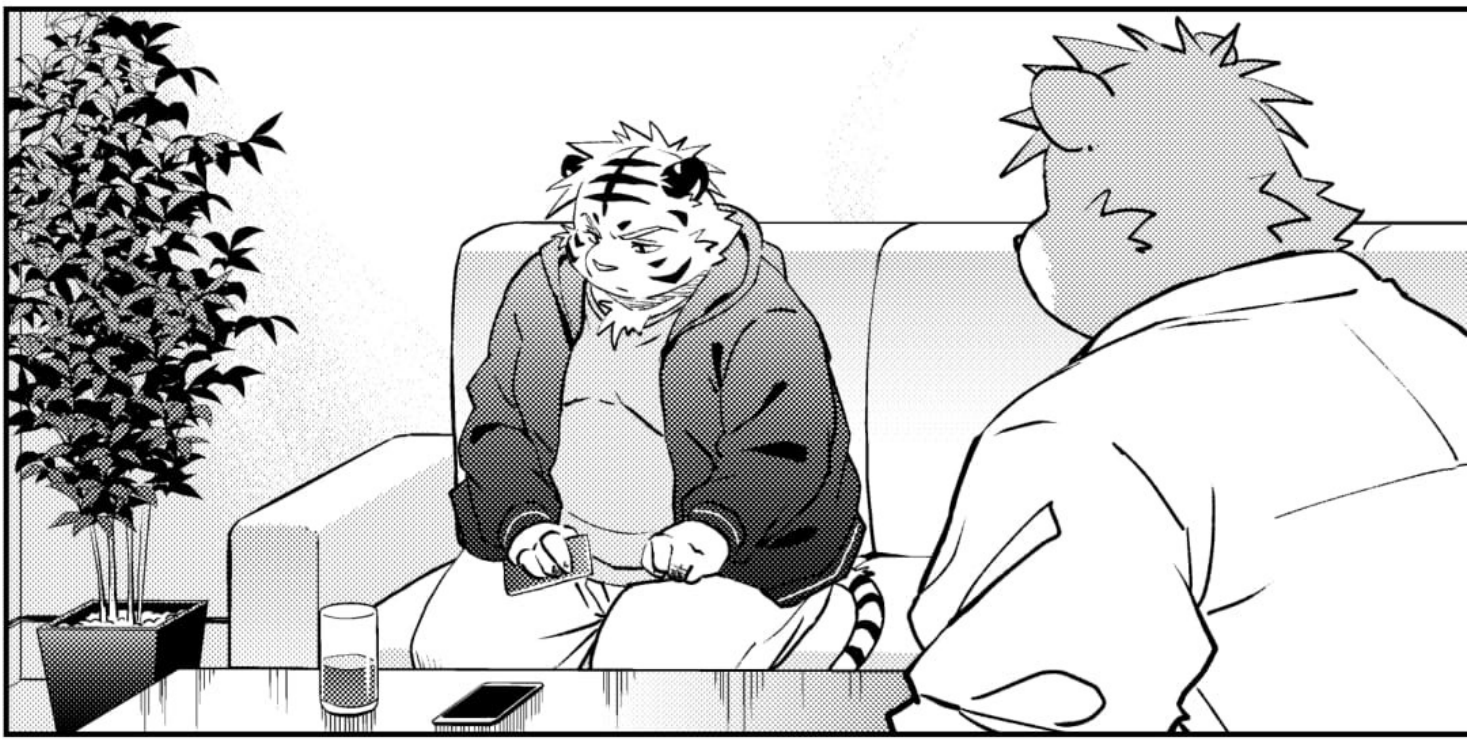

ぐっ
ハッ
ハッ


クソ…！
ここまでのつもりじゃなかった…
クソ…！
でもこれでアイツを…！
アイツを追い込むことが…！
出来る…!!




最悪逃げられるように…


カチャ




あれ服着ちゃってもう帰るの？
ん？手怪我したの？


スス…
ケン君は週に何回くらいオナニーしてるのかな？
えーと…
言えないほどしてるのかな？
お腹キツいでしょ


やだなあ
どうしたの？
ソレ
…何の
マネかな？
感度
あげようか
バッグの
隙間から
撮らせて
もらいました
これ
感度良くなる
サプリ
ほれ
…え？
…
それと
アンタの
ケータイ
いじらせて
もらいました
何か
見つかれば
思いましたが
やっぱり
ロックが
掛ってました


このロック画面
21:44
21:44
パターンを入力して画面ロックを解除
女の子とその隣は母親ですかね？


実はオレの友達にアンタと関係を持っている人がいるんですよ

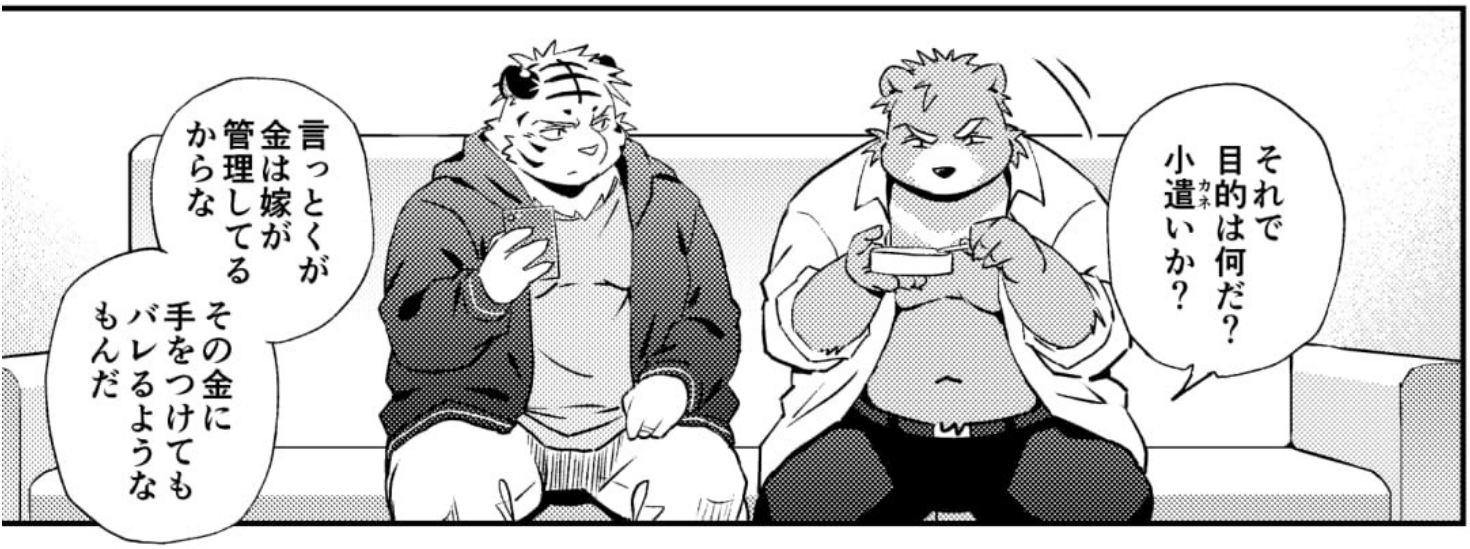

…
何かおかしいか？


だから聞いているんです


この子がアンタの娘さんだという事も
その隣の女性が別居中の奥さんだという事も…！


もし
この撮った
動画を
ネットで
拡散したら
…？
アンタの
会社の人たちは
もちろん
別居中の
奥さんの
目にも止まる
でしょうね
…
ふー…
なるほど
キミが
ボタ君が
いつも話してた
『ゆー君』か
…ボタ君と
計画したの？
こんな
オッサンの
為に？


ボタ君は
関わってない
オレが
勝手にやってる
事だ…！
なるほど…
まあ嫁に
バラされるのは
もちろん
その動画は
いろいろ困る
ねえ


それで
目的は何だ？
小遣(カネ)いか？
言っとくが
金は嫁が
管理してる
からな
その金に
手をつけても
バレるような
もんだ


お金
なんかじゃ
ないよ…！
ボタ君は
アンタの事
信用して
付き合って
いたんだ…
なのに
アンタは
そこに
付け込んで
…
アンタは…


なのに
アンタは
…ッ!!

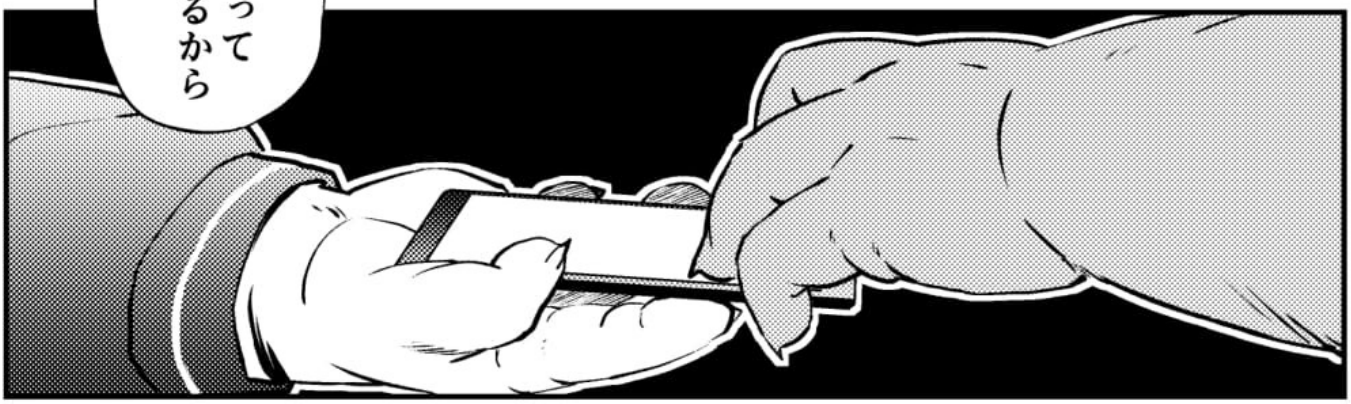

だから…！
ボタ君に謝れ…!!


…
…


…わかった


ただ…謝りに行きたいところだが
明日朝早くてな


いいよ
ボタ君が家で待ってるまずは電話で謝れ
…ああわかった
あボタ君起きてた？
…うん
…何とかね
Reveur IV
今替わって謝らせるから




オレも最初はボタ君に本気だったんだよ
当然嫁との別れも頭を過ぎったよ
でも男ってよ出しちまうと冷静になれるだろ？
ボタ君だってこんなオッサンとじゃ将来不安だろ？


だから心を鬼にして突き放した…愛するが故だよ
…それは言い逃れだよ…


ボタ君はとんだバカに好かれてるんだな
えっ？


…え？
！！！


馬鹿かテメェは…！
要求飲ます前によぉ…！


交渉材料渡したらダメだろうが!!
馬鹿が…ッ!!


馬鹿が…ッ!!

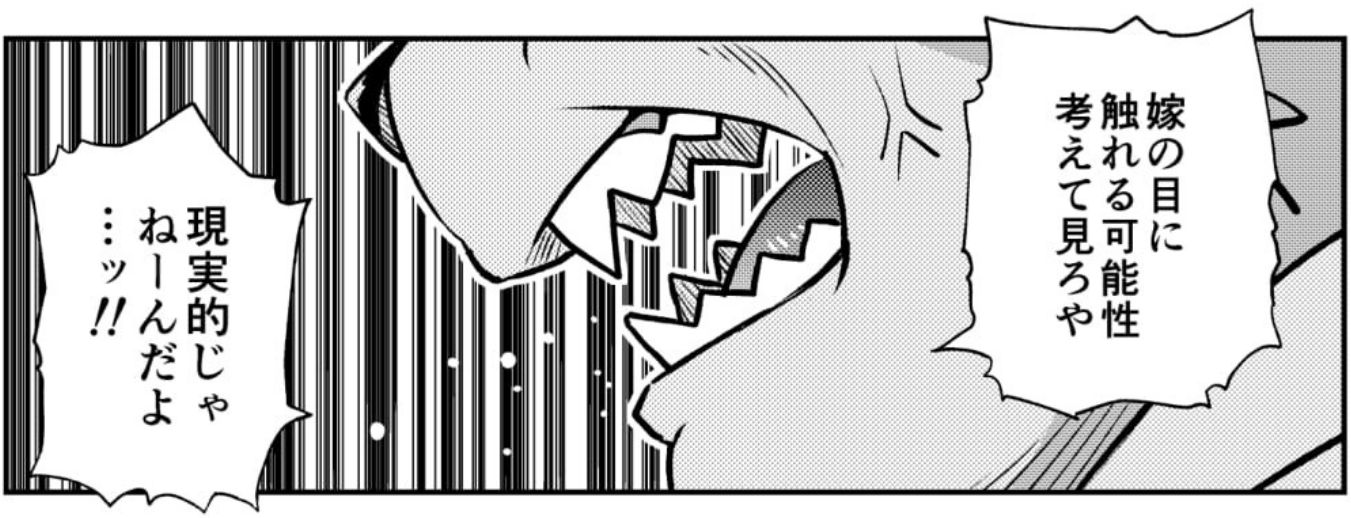

動画なんて
消して終えだ
21:47
動画を端末から削除しました。
OK
ご苦労様でした



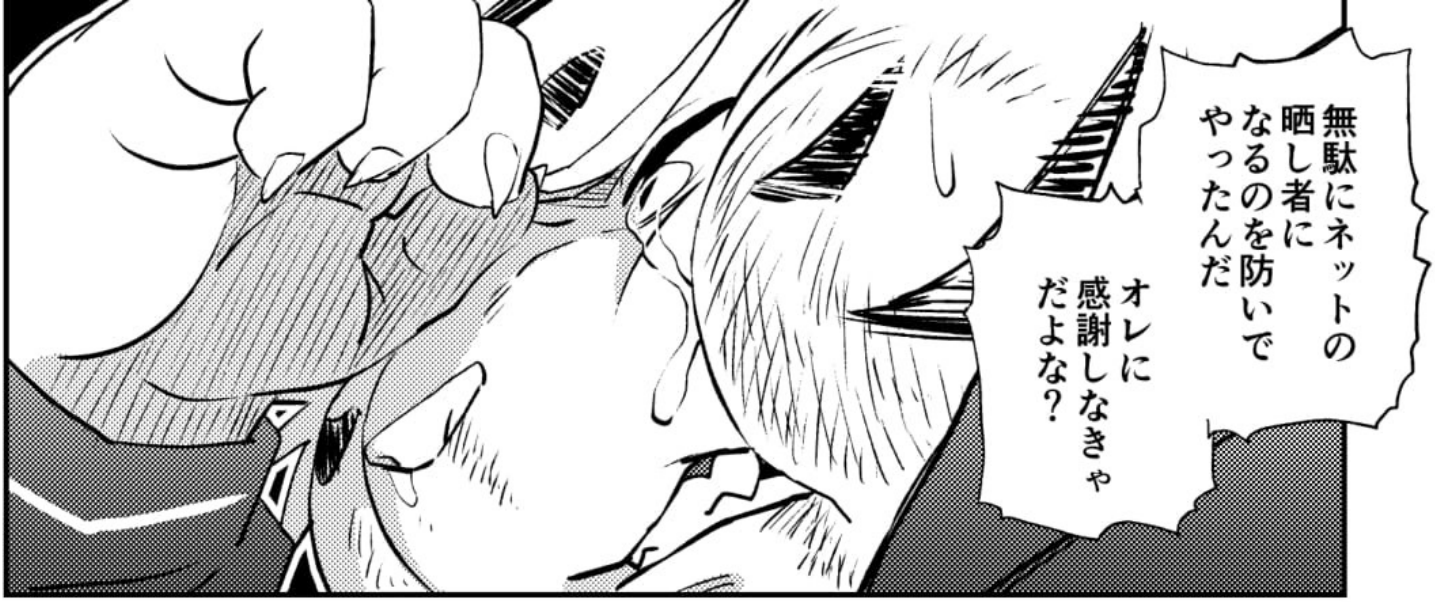
え…ウソだろ…!?



何やってんだよ…!?



何やってんだよオレは…!?



ボタ君…ごめん…



オレ…ダメだった…




ちょっと…!!
何やってるの…!?


!?
!?


どういう事…!?
ゆー君…大丈夫!?


チッ


動かないで
コーテツさん
警察呼ぶよ!!


どういう
事だ?
テメェ…
さっき単独(ひとり)犯
言(っ)ったよな?


…ッ!


…
チッ
テメェも
予想外って
ツラだな


あ…謝れ


早く謝れッ!!!
…ッ!!
ガク
ガク
ボタ君…
すまなかった…
悪い事をした…
…




帰ろう…
ボタ君
…
これで
いいか？
あ…
…うん
おい
ゆー君
(クソガキ)
よぉ…
大人を
あんまり
ナメるなよ？
……


ガキを
ナメるなッ!!!
クッソ
ジジイッ!!!


ボタ君
走って!!
待てや
コラァッ!!


こんの
クソガキャア
ァァアァッ!!!


クソッ
待ちやがれ!!
体力ねぇな
クソジジイ!!
ハァ…
ハァ…
クソ…ッ
さようなら
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ボタ君は
…
ハァ…
何で
あの場に?
ハァ…

コーテツさん
何するか
分からない
人だし

ゆー君の
言った通り家で
待ってたけど

全然
連絡ないし
心配に
なって…

コーテツさんの
家に向かって
たの…





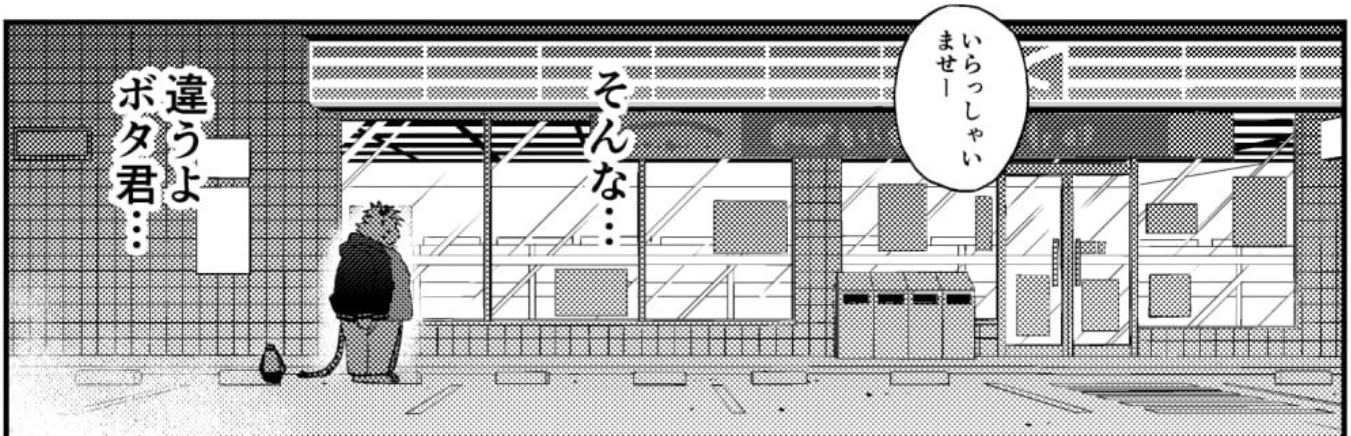





いやそんな
大丈夫だから


ゆー君
ありがとね


…


いらっしゃいませー
そんな…
違うよボタ君…


ボタ君…
トクン…
トクン…
いつか
キミから
本当の……

誰も助けに入らすそのままオシオキされちゃう
展開の方がエロ的には良いんだろうな～
うーん…でも話も前に進めたいし
うーん…と悩みました。

あとこの話の続きを描くのが4年ぶりということで
再録の部分と絵柄が変わってて見辛かったかと思います。
すみません！

それではまたどこかで！

スペシャルサンクス：
「いぬさわさん」
「もけさん」



風に吹かれて

発　行　ぽぽでぃらん
編　集　ぽぽんパペオン
発行日　2018年4月30日
連絡先　pponvii@gmail.com

無断転載・複写・複製は固く禁じます。

心ちゃんね

今日も塾サボって
市の卓球クラブ
行ってたみたい…

それでは次の
ニュースです
今朝6時半頃

成績落ち
ないんだから
良いじゃない

ちょっと待って
それじゃあ
ただの現状維持
じゃない

何の為に
高い月謝
払ってると
思ってるの!?

どーよ
落ち着いた？
22:05

既読
22:05
全然

まさか心美も明日から
来なくなるとかないよね？
22:07

既読
22:07
なんか段々落ち込んできた

もー！！
22:10

夕方のは冗談だって(笑)
22:11

一方その頃…

のり塩
おっそいな？…

Presented By

POPO DYLAN

『風に吹かれて』

Kaze Ni Hukarete